

# 板木の修訂

長谷川 強

板木の部分的な修訂は、何らかの理由で墨丁として残していた箇所を補刻する場合、誤字を正したり、事情の変更に応じる修正をしたりする場合、板木が磨滅した時、特にひどい箇所を補刻したりというような時に行われる。このような場合の板本異動調査は勿論十分に行われねばならぬのであるが、その他にある意図をもって修訂を加える事がある。著作権も保証されず、また大衆読物として作品というよりは商品扱いをされた軟文字にその弊は露わで、板木所有の本屋の恣意による改題に伴なう題名所記部分の改刻、コスト軽減か板木失却か後印本における挿絵省略、補刻丁の振仮名省略とか、三巻三冊本を分割して五冊に仕立てるというように外見の冊数をふやすのに応じた目録や分割部の補刻とか芳しからぬ事例が多い。拙著『浮世草子考証年表』にはそれらの注意はしたつもりで、年表と銘打った本を通読される方は恐らくあるまいけれど、行数の多い項だけでも拾い読みをしていただくと、そういう方面に関心を持たれる方には多少の参考にはなろう。本稿はそれらの具体例を写真入りで、小細工の跡を一目瞭然たらしめる事によって板本調査の参考と

するという、同僚某氏のすすめやらおだてやらに乗って用意をはじめたのであるが、写真を集めるのが意外に面倒であり、まさような細工の著しい例から手がけようとしたら拙著年表の記述不足が目について来て、その考証の方にのめり込んで、広くいろいろの事例をあげる事が出来なかった。それに問題の原本同士を突合せて検討する事は不可能で、写真による突合せであるから論が細密に及べぬ点もあろう。御容赦を願う次第である。なお写真所掲本御所蔵者名と略称は左の通りである。

国会本（国会図書館）・東洋本（東洋文庫）・都立本（都立中央図書館）・東大本（東京大学附属図書館霞亭文庫）・東北大本（東北大学附属図書館狩野文庫）・芸大本（東京芸術大学図書館）・京大本（京都大学文学部文学科閲覧室）・阪大本（大阪大学文学部忍頂寺文庫）・早大本（早稲田大学附属図書館）・演博本（同演劇博物館）・中村本（中村幸彦氏）

御所蔵者各位及び閲覧・撮影等でお世話いただいた掛りの方々に謝意を表するものである。

宝永六年秋序刊、八文字屋八左衛門板、八文字自笑名の序を有するが実作者は江島其碩と推定される『遊女懷中洗濯』横本五卷五冊は、その板木の半ば以上を享保二年四月八文字屋刊『野傾髪透油』横本三卷三冊に再用、各巻第一章を新補の役者評判とし、第二章以下に『懷中洗濯』を当てており、更に発端・末尾などを挿しかえ、『髪透油』に利用の板木については三用、それ以外については再用して享保七年正月八文字屋刊『けいせい卵子酒』に仕立てられた事、『懷中洗濯』はこのような事情にも 불구하고完本の伝存未詳で、第一巻京之巻、第五巻風流之巻については推定によらざるを得ぬのであるが、風流之巻は『懷中洗濯』の時点で既に元禄十二年三月刊の八文字屋板役者評判記『役者口三味線』等の板木の修補再用と考えられる事などを拙稿「遊女懷中洗濯よりけいせい卵子酒まで」(かがみ第二十五号)に述べた。以上を表に示せば下のようになる。

このうちの要所について二三記す。

『髪透油』江戸之巻の場合、『懷中洗濯』江戸之巻の第一章を除き、第二章以下を『髪透油』の第二章以下に当てているのであるが、『懷中洗濯』では廿二丁裏の九行目から第二章がはじまるのに、『髪透油』では前章の役者評判が廿二丁裏(『懷中洗濯』から十ノ廿の飛丁があるが、『髪透油』もこの丁の丁付が『懷中洗濯』のそれにあうように前に飛丁をつくっている)十一行目で終り、『懷中洗濯』第二章をそのまま後に継ぐ事は出来ない。そこで『懷中洗濯』第二章のこの丁裏末行までの本文六行を三行に縮約して、新製の『髪透油』廿二丁裏の板木末に章題共

『口三味線』		『懷中洗濯』		『髪透油』		『卵子酒』	
京ノ一	二	京ノ一	二	京ノ一(新補評判)	二	京ノ一(発端部新補)	二
大坂ノ一	三	大坂ノ一	三	大坂ノ一(新補評判)	三	大坂ノ一(発端部新補)	三
江戸ノ一	四	江戸ノ一	四	江戸ノ一(新補評判)	四	江戸ノ一(発端部新補)	四
江戸ノ二	五	江戸ノ二	五	江戸ノ二(新補評判)	五	江戸ノ二(発端部新補)	五
江戸ノ三	六	江戸ノ三	六	江戸ノ三(新補評判)	六	江戸ノ三(発端部新補)	六
江戸ノ四	七	江戸ノ四	七	江戸ノ四(新補評判)	七	江戸ノ四(発端部新補)	七
江戸ノ五	八	江戸ノ五	八	江戸ノ五(新補評判)	八	江戸ノ五(発端部新補)	八
江戸ノ六	九	江戸ノ六	九	江戸ノ六(新補評判)	九	江戸ノ六(発端部新補)	九
江戸ノ七	十	江戸ノ七	十	江戸ノ七(新補評判)	十	江戸ノ七(発端部新補)	十
江戸ノ八	十一	江戸ノ八	十一	江戸ノ八(新補評判)	十一	江戸ノ八(発端部新補)	十一
江戸ノ九	十二	江戸ノ九	十二	江戸ノ九(新補評判)	十二	江戸ノ九(発端部新補)	十二
江戸ノ十	十三	江戸ノ十	十三	江戸ノ十(新補評判)	十三	江戸ノ十(発端部新補)	十三
江戸ノ十一	十四	江戸ノ十一	十四	江戸ノ十一(新補評判)	十四	江戸ノ十一(発端部新補)	十四
江戸ノ十二	十五	江戸ノ十二	十五	江戸ノ十二(新補評判)	十五	江戸ノ十二(発端部新補)	十五
江戸ノ十三	十六	江戸ノ十三	十六	江戸ノ十三(新補評判)	十六	江戸ノ十三(発端部新補)	十六
江戸ノ十四	十七	江戸ノ十四	十七	江戸ノ十四(新補評判)	十七	江戸ノ十四(発端部新補)	十七
江戸ノ十五	十八	江戸ノ十五	十八	江戸ノ十五(新補評判)	十八	江戸ノ十五(発端部新補)	十八
江戸ノ十六	十九	江戸ノ十六	十九	江戸ノ十六(新補評判)	十九	江戸ノ十六(発端部新補)	十九
江戸ノ十七	二十	江戸ノ十七	二十	江戸ノ十七(新補評判)	二十	江戸ノ十七(発端部新補)	二十
江戸ノ十八	二十一	江戸ノ十八	二十一	江戸ノ十八(新補評判)	二十一	江戸ノ十八(発端部新補)	二十一
江戸ノ十九	二十二	江戸ノ十九	二十二	江戸ノ十九(新補評判)	二十二	江戸ノ十九(発端部新補)	二十二
江戸ノ二十	二十三	江戸ノ二十	二十三	江戸ノ二十(新補評判)	二十三	江戸ノ二十(発端部新補)	二十三
江戸ノ二十一	二十四	江戸ノ二十一	二十四	江戸ノ二十一(新補評判)	二十四	江戸ノ二十一(発端部新補)	二十四
江戸ノ二十二	二十五	江戸ノ二十二	二十五	江戸ノ二十二(新補評判)	二十五	江戸ノ二十二(発端部新補)	二十五
江戸ノ二十三	二十六	江戸ノ二十三	二十六	江戸ノ二十三(新補評判)	二十六	江戸ノ二十三(発端部新補)	二十六
江戸ノ二十四	二十七	江戸ノ二十四	二十七	江戸ノ二十四(新補評判)	二十七	江戸ノ二十四(発端部新補)	二十七
江戸ノ二十五	二十八	江戸ノ二十五	二十八	江戸ノ二十五(新補評判)	二十八	江戸ノ二十五(発端部新補)	二十八
江戸ノ二十六	二十九	江戸ノ二十六	二十九	江戸ノ二十六(新補評判)	二十九	江戸ノ二十六(発端部新補)	二十九
江戸ノ二十七	三十	江戸ノ二十七	三十	江戸ノ二十七(新補評判)	三十	江戸ノ二十七(発端部新補)	三十
江戸ノ二十八	三十一	江戸ノ二十八	三十一	江戸ノ二十八(新補評判)	三十一	江戸ノ二十八(発端部新補)	三十一
江戸ノ二十九	三十二	江戸ノ二十九	三十二	江戸ノ二十九(新補評判)	三十二	江戸ノ二十九(発端部新補)	三十二
江戸ノ三十	三十三	江戸ノ三十	三十三	江戸ノ三十(新補評判)	三十三	江戸ノ三十(発端部新補)	三十三
江戸ノ三十一	三十四	江戸ノ三十一	三十四	江戸ノ三十一(新補評判)	三十四	江戸ノ三十一(発端部新補)	三十四
江戸ノ三十二	三十五	江戸ノ三十二	三十五	江戸ノ三十二(新補評判)	三十五	江戸ノ三十二(発端部新補)	三十五
江戸ノ三十三	三十六	江戸ノ三十三	三十六	江戸ノ三十三(新補評判)	三十六	江戸ノ三十三(発端部新補)	三十六
江戸ノ三十四	三十七	江戸ノ三十四	三十七	江戸ノ三十四(新補評判)	三十七	江戸ノ三十四(発端部新補)	三十七
江戸ノ三十五	三十八	江戸ノ三十五	三十八	江戸ノ三十五(新補評判)	三十八	江戸ノ三十五(発端部新補)	三十八
江戸ノ三十六	三十九	江戸ノ三十六	三十九	江戸ノ三十六(新補評判)	三十九	江戸ノ三十六(発端部新補)	三十九
江戸ノ三十七	四十	江戸ノ三十七	四十	江戸ノ三十七(新補評判)	四十	江戸ノ三十七(発端部新補)	四十
江戸ノ三十八	四十一	江戸ノ三十八	四十一	江戸ノ三十八(新補評判)	四十一	江戸ノ三十八(発端部新補)	四十一
江戸ノ三十九	四十二	江戸ノ三十九	四十二	江戸ノ三十九(新補評判)	四十二	江戸ノ三十九(発端部新補)	四十二
江戸ノ四十	四十三	江戸ノ四十	四十三	江戸ノ四十(新補評判)	四十三	江戸ノ四十(発端部新補)	四十三
江戸ノ四十一	四十四	江戸ノ四十一	四十四	江戸ノ四十一(新補評判)	四十四	江戸ノ四十一(発端部新補)	四十四
江戸ノ四十二	四十五	江戸ノ四十二	四十五	江戸ノ四十二(新補評判)	四十五	江戸ノ四十二(発端部新補)	四十五
江戸ノ四十三	四十六	江戸ノ四十三	四十六	江戸ノ四十三(新補評判)	四十六	江戸ノ四十三(発端部新補)	四十六
江戸ノ四十四	四十七	江戸ノ四十四	四十七	江戸ノ四十四(新補評判)	四十七	江戸ノ四十四(発端部新補)	四十七
江戸ノ四十五	四十八	江戸ノ四十五	四十八	江戸ノ四十五(新補評判)	四十八	江戸ノ四十五(発端部新補)	四十八
江戸ノ四十六	四十九	江戸ノ四十六	四十九	江戸ノ四十六(新補評判)	四十九	江戸ノ四十六(発端部新補)	四十九
江戸ノ四十七	五十	江戸ノ四十七	五十	江戸ノ四十七(新補評判)	五十	江戸ノ四十七(発端部新補)	五十
江戸ノ四十八	五十一	江戸ノ四十八	五十一	江戸ノ四十八(新補評判)	五十一	江戸ノ四十八(発端部新補)	五十一
江戸ノ四十九	五十二	江戸ノ四十九	五十二	江戸ノ四十九(新補評判)	五十二	江戸ノ四十九(発端部新補)	五十二
江戸ノ五十	五十三	江戸ノ五十	五十三	江戸ノ五十(新補評判)	五十三	江戸ノ五十(発端部新補)	五十三
江戸ノ五十一	五十四	江戸ノ五十一	五十四	江戸ノ五十一(新補評判)	五十四	江戸ノ五十一(発端部新補)	五十四
江戸ノ五十二	五十五	江戸ノ五十二	五十五	江戸ノ五十二(新補評判)	五十五	江戸ノ五十二(発端部新補)	五十五
江戸ノ五十三	五十六	江戸ノ五十三	五十六	江戸ノ五十三(新補評判)	五十六	江戸ノ五十三(発端部新補)	五十六
江戸ノ五十四	五十七	江戸ノ五十四	五十七	江戸ノ五十四(新補評判)	五十七	江戸ノ五十四(発端部新補)	五十七
江戸ノ五十五	五十八	江戸ノ五十五	五十八	江戸ノ五十五(新補評判)	五十八	江戸ノ五十五(発端部新補)	五十八
江戸ノ五十六	五十九	江戸ノ五十六	五十九	江戸ノ五十六(新補評判)	五十九	江戸ノ五十六(発端部新補)	五十九
江戸ノ五十七	六十	江戸ノ五十七	六十	江戸ノ五十七(新補評判)	六十	江戸ノ五十七(発端部新補)	六十
江戸ノ五十八	六十一	江戸ノ五十八	六十一	江戸ノ五十八(新補評判)	六十一	江戸ノ五十八(発端部新補)	六十一
江戸ノ五十九	六十二	江戸ノ五十九	六十二	江戸ノ五十九(新補評判)	六十二	江戸ノ五十九(発端部新補)	六十二
江戸ノ六十	六十三	江戸ノ六十	六十三	江戸ノ六十(新補評判)	六十三	江戸ノ六十(発端部新補)	六十三
江戸ノ六十一	六十四	江戸ノ六十一	六十四	江戸ノ六十一(新補評判)	六十四	江戸ノ六十一(発端部新補)	六十四
江戸ノ六十二	六十五	江戸ノ六十二	六十五	江戸ノ六十二(新補評判)	六十五	江戸ノ六十二(発端部新補)	六十五
江戸ノ六十三	六十六	江戸ノ六十三	六十六	江戸ノ六十三(新補評判)	六十六	江戸ノ六十三(発端部新補)	六十六
江戸ノ六十四	六十七	江戸ノ六十四	六十七	江戸ノ六十四(新補評判)	六十七	江戸ノ六十四(発端部新補)	六十七
江戸ノ六十五	六十八	江戸ノ六十五	六十八	江戸ノ六十五(新補評判)	六十八	江戸ノ六十五(発端部新補)	六十八
江戸ノ六十六	六十九	江戸ノ六十六	六十九	江戸ノ六十六(新補評判)	六十九	江戸ノ六十六(発端部新補)	六十九
江戸ノ六十七	七十	江戸ノ六十七	七十	江戸ノ六十七(新補評判)	七十	江戸ノ六十七(発端部新補)	七十
江戸ノ六十八	七十一	江戸ノ六十八	七十一	江戸ノ六十八(新補評判)	七十一	江戸ノ六十八(発端部新補)	七十一
江戸ノ六十九	七十二	江戸ノ六十九	七十二	江戸ノ六十九(新補評判)	七十二	江戸ノ六十九(発端部新補)	七十二
江戸ノ七十	七十三	江戸ノ七十	七十三	江戸ノ七十(新補評判)	七十三	江戸ノ七十(発端部新補)	七十三
江戸ノ七十一	七十四	江戸ノ七十一	七十四	江戸ノ七十一(新補評判)	七十四	江戸ノ七十一(発端部新補)	七十四
江戸ノ七十二	七十五	江戸ノ七十二	七十五	江戸ノ七十二(新補評判)	七十五	江戸ノ七十二(発端部新補)	七十五
江戸ノ七十三	七十六	江戸ノ七十三	七十六	江戸ノ七十三(新補評判)	七十六	江戸ノ七十三(発端部新補)	七十六
江戸ノ七十四	七十七	江戸ノ七十四	七十七	江戸ノ七十四(新補評判)	七十七	江戸ノ七十四(発端部新補)	七十七
江戸ノ七十五	七十八	江戸ノ七十五	七十八	江戸ノ七十五(新補評判)	七十八	江戸ノ七十五(発端部新補)	七十八
江戸ノ七十六	七十九	江戸ノ七十六	七十九	江戸ノ七十六(新補評判)	七十九	江戸ノ七十六(発端部新補)	七十九
江戸ノ七十七	八十	江戸ノ七十七	八十	江戸ノ七十七(新補評判)	八十	江戸ノ七十七(発端部新補)	八十
江戸ノ七十八	八十一	江戸ノ七十八	八十一	江戸ノ七十八(新補評判)	八十一	江戸ノ七十八(発端部新補)	八十一
江戸ノ七十九	八十二	江戸ノ七十九	八十二	江戸ノ七十九(新補評判)	八十二	江戸ノ七十九(発端部新補)	八十二
江戸ノ八十	八十三	江戸ノ八十	八十三	江戸ノ八十(新補評判)	八十三	江戸ノ八十(発端部新補)	八十三
江戸ノ八十一	八十四	江戸ノ八十一	八十四	江戸ノ八十一(新補評判)	八十四	江戸ノ八十一(発端部新補)	八十四
江戸ノ八十二	八十五	江戸ノ八十二	八十五	江戸ノ八十二(新補評判)	八十五	江戸ノ八十二(発端部新補)	八十五
江戸ノ八十三	八十六	江戸ノ八十三	八十六	江戸ノ八十三(新補評判)	八十六	江戸ノ八十三(発端部新補)	八十六
江戸ノ八十四	八十七	江戸ノ八十四	八十七	江戸ノ八十四(新補評判)	八十七	江戸ノ八十四(発端部新補)	八十七
江戸ノ八十五	八十八	江戸ノ八十五	八十八	江戸ノ八十五(新補評判)	八十八	江戸ノ八十五(発端部新補)	八十八
江戸ノ八十六	八十九	江戸ノ八十六	八十九	江戸ノ八十六(新補評判)	八十九	江戸ノ八十六(発端部新補)	八十九
江戸ノ八十七	九十	江戸ノ八十七	九十	江戸ノ八十七(新補評判)	九十	江戸ノ八十七(発端部新補)	九十
江戸ノ八十八	九十一	江戸ノ八十八	九十一	江戸ノ八十八(新補評判)	九十一	江戸ノ八十八(発端部新補)	九十一
江戸ノ八十九	九十二	江戸ノ八十九	九十二	江戸ノ八十九(新補評判)	九十二	江戸ノ八十九(発端部新補)	九十二
江戸ノ九十	九十三	江戸ノ九十	九十三	江戸ノ九十(新補評判)	九十三	江戸ノ九十(発端部新補)	九十三
江戸ノ九十一	九十四	江戸ノ九十一	九十四	江戸ノ九十一(新補評判)	九十四	江戸ノ九十一(発端部新補)	九十四
江戸ノ九十二	九十五	江戸ノ九十二	九十五	江戸ノ九十二(新補評判)	九十五	江戸ノ九十二(発端部新補)	九十五
江戸ノ九十三	九十六	江戸ノ九十三	九十六	江戸ノ九十三(新補評判)	九十六	江戸ノ九十三(発端部新補)	九十六
江戸ノ九十四	九十七	江戸ノ九十四	九十七	江戸ノ九十四(新補評判)	九十七	江戸ノ九十四(発端部新補)	九十七
江戸ノ九十五	九十八	江戸ノ九十五	九十八	江戸ノ九十五(新補評判)	九十八	江戸ノ九十五(発端部新補)	九十八
江戸ノ九十六	九十九	江戸ノ九十六	九十九	江戸ノ九十六(新補評判)	九十九	江戸ノ九十六(発端部新補)	九十九
江戸ノ九十七	一百	江戸ノ九十七	一百	江戸ノ九十七(新補評判)	一百	江戸ノ九十七(発端部新補)	一百
江戸ノ九十八	一百一	江戸ノ九十八	一百一	江戸ノ九十八(新補評判)	一百一	江戸ノ九十八(発端部新補)	一百一
江戸ノ九十九	一百二	江戸ノ九十九	一百二	江戸ノ九十九(新補評判)	一百二	江戸ノ九十九(発端部新補)	一百二
江戸ノ一百	一百三	江戸ノ一百	一百三	江戸ノ一百(新補評判)	一百三	江戸ノ一百(発端部新補)	一百三
江戸ノ一百一	一百四	江戸ノ一百一	一百四	江戸ノ一百一(新補評判)	一百四	江戸ノ一百一(発端部新補)	一百四
江戸ノ一百二	一百五	江戸ノ一百二	一百五	江戸ノ一百二(新補評判)	一百五	江戸ノ一百二(発端部新補)	一百五
江戸ノ一百三	一百六	江戸ノ一百三	一百六	江戸ノ一百三(新補評判)	一百六	江戸ノ一百三(発端部新補)	一百六
江戸ノ一百四	一百七	江戸ノ一百四	一百七	江戸ノ一百四(新補評判)	一百七	江戸ノ一百四(発端部新補)	一百七
江戸ノ一百五	一百八	江戸ノ一百五	一百八	江戸ノ一百五(新補評判)	一百八	江戸ノ一百五(発端部新補)	一百八
江戸ノ一百六	一百九	江戸ノ一百六	一百九	江戸ノ一百六(新補評判)	一百九	江戸ノ一百六(発端部新補)	一百九
江戸ノ一百七	二百	江戸ノ一百七	二百	江戸ノ一百七(新補評判)	二百	江戸ノ一百七(発端部新補)	二百
江戸ノ一百八	二百一	江戸ノ一百八	二百一	江戸ノ一百八(新補評判)	二百一	江戸ノ一百八(発端部新補)	二百一
江戸ノ一百九	二百二	江戸ノ一百九	二百二	江戸ノ一百九(新補評判)	二百二	江戸ノ一百九(発端部新補)	二百二
江戸ノ二百	二百三	江戸ノ二百	二百三	江戸ノ二百(新補評判)	二百三	江戸ノ二百(発端部新補)	二百三
江戸ノ二百一	二百四	江戸ノ二百一	二百四	江戸ノ二百一(新補評判)	二百四	江戸ノ二百一(発端部新補)	二百四
江戸ノ二百二	二百五	江戸ノ二百二	二百五	江戸ノ二百二(新補評判)	二百五	江戸ノ二百二(発端部新補)	二百五
江戸ノ二百三	二百六	江戸ノ二百三	二百六	江戸ノ二百三(新補評判)	二百六	江戸ノ二百三(発端部新補)	二百六
江戸ノ二百四	二百七	江戸ノ二百四	二百七	江戸ノ二百四(新補評判)	二百七	江戸ノ二百四(発端部新補)	二百七
江戸ノ二百五	二百八	江戸ノ二百五	二百八	江戸ノ二百五(新補評判)	二百八	江戸ノ二百五(発端部新補)	二百八
江戸ノ二百六	二百九	江戸ノ二百六	二百九	江戸ノ二百六(新補評判)	二百九	江戸ノ二百六(発端部新補)	二百九
江戸ノ二百七	三百	江戸ノ二百七	三百	江戸ノ二百七(新補評判)	三百	江戸ノ二百七(発端部新補)	三百
江戸ノ二百八	三百一	江戸ノ二百八	三百一	江戸ノ二百八(新補評判)	三百一	江戸ノ二百八(発端部新補)	三百一
江戸ノ二百九	三百二	江戸ノ二百九	三百二	江戸ノ二百九(新補評判)	三百二	江戸ノ二百九(発端部新補)	三百二
江戸ノ三百	三百三	江戸ノ三百	三百三	江戸ノ三百(新補評判)	三百三	江戸ノ三百(発端部新補)	三百三
江戸ノ三百一	三百四	江戸ノ三百一	三百四	江戸ノ三百一(新補評判)	三百四	江戸ノ三百一(発端部新補)	三百四
江戸ノ三百二	三百五	江戸ノ三百二	三百五	江戸ノ三百二(新補評判)	三百五	江戸ノ三百二(発端部新補)	三百五
江戸ノ三百三	三百六	江戸ノ三百三	三百六	江戸ノ三百三(新補評判)	三百六	江戸ノ三百三(発端部新補)	三百六
江戸ノ三百四	三百七	江戸ノ三百四	三百七	江戸ノ三百四(新補評判)	三百七	江戸ノ三百四(発端部新補)	三百七
江戸ノ三百五	三百八	江戸ノ三百五	三百八	江戸ノ三百五(新補評判)	三百八	江戸ノ三百五(発端部新補)	三百八
江戸ノ三百六	三百九	江戸ノ三百六	三百九	江戸ノ三百六(新補評判)	三百九	江戸ノ三百六(発端部新補)	三百九
江戸ノ三百七	四百	江戸ノ三百七	四百	江戸ノ三百七(新補評判)	四百	江戸ノ三百七(発端部新補)	四百
江戸ノ三百八	四百一	江戸ノ三百八	四百一	江戸ノ三百八(新補評判)	四百一	江戸ノ三百八(発端部新補)	四百一
江戸ノ三百九	四百二	江戸ノ三百九	四百二	江戸ノ三百九(新補評判)	四百二	江戸ノ三百九(発端部新補)	四百二
江戸ノ四百	四百三	江戸ノ四百	四百三	江戸ノ四百(新補評判)	四百三	江戸ノ四百(発端部新補)	四百三
江戸ノ四百一	四百四	江戸ノ四百一	四百四	江戸ノ四百一(新補評判)	四百四	江戸ノ四百一(発端部新補)	四百四
江戸ノ四百二	四百五	江戸ノ四百二	四百五	江戸ノ四百二(新補評判)	四百五	江戸ノ四百二(発端部新補)	四百五
江戸ノ四百三	四百六	江戸ノ四百三	四百六	江戸ノ四百三(新補評判)	四百六	江戸ノ四百三(発端部新補)	四百六
江戸ノ四百四	四百七	江戸ノ四百四	四百七	江戸ノ四百四(新補評判)	四百七	江戸ノ四百四(発端部新補)	四百七
江戸ノ四百五	四百八	江戸ノ四百五	四百八	江戸ノ四百五(新補評判)	四百八	江戸ノ四百五(発端部新補)	四百八
江戸ノ四百六	四百九	江戸ノ四百六	四百九	江戸ノ四百六(新補評判)	四百九	江戸ノ四百六(発端部新補)	四百九
江戸ノ四百七	五百	江戸ノ四百七	五百	江戸ノ四百七(新補評判)	五百	江戸ノ四百七(発端部新補)	五百
江戸ノ四百八	五百一	江戸ノ四百八	五百一	江戸ノ四百八(新補評判)	五百一	江戸ノ四百八(発端部新補)	五百一
江戸ノ四百九	五百二	江戸ノ四百九	五百二	江戸ノ四百九(新補評判)	五百二	江戸ノ四百九(発端部新補)	五百二
江戸ノ五百	五百三	江戸ノ五百	五百三	江戸ノ五百(新補評判)	五百三	江戸ノ五百(発端部新補)	五百三
江戸ノ五百一	五百四	江戸ノ五百一	五百四	江戸ノ五百一(新補評判)	五百四	江戸ノ五百一(発端部新補)	五百四
江戸ノ五百二	五百五	江戸ノ五百二	五百五	江戸ノ五百二(新補評判)	五百五	江戸ノ五百二(発端部新補)	五百五
江戸ノ五百三	五百六	江戸ノ五百三	五百六	江戸ノ五百三(新補評判)	五百六	江戸ノ五百三(発端部新補)	五百六
江戸ノ五百四	五百七	江戸ノ五百四	五百七	江戸ノ五百四(新補評判)	五百七	江戸ノ五百四(発端部新補)	五百七
江戸ノ五百五	五百八	江戸ノ五百五	五百八	江戸ノ五百五(新補評判)	五百八	江戸ノ五百五(発端部新補)	五百八
江戸ノ五百六	五百九	江戸ノ五百六	五百九	江戸ノ五百六(新補評判)	五百九	江戸ノ五百六(発端部新補)	五百九
江戸ノ五百七	六百	江戸ノ五百七	六百	江戸ノ五百七(新補評判)	六百	江戸ノ五百七(発端部新補)	六百
江戸ノ五百八	六百一	江戸ノ五百八	六百一	江戸ノ五百八(新補評判)	六百一	江戸ノ五百八(発端部新補)	六百一
江戸ノ五百九	六百二	江戸ノ五百九	六百二	江戸ノ五百九(新補評判)	六百二	江戸ノ五百九(発端部新補)	六百二
江戸ノ六百	六百三	江戸ノ六百	六百三	江戸ノ六百(新補評判)	六百三	江戸ノ六百(発端部新補)	六百三
江戸ノ六百一	六百四	江戸ノ六百一	六百四	江戸ノ六百一(新補評判)	六百四	江戸ノ六百一(発端部新補)	六百四
江戸ノ六百二	六百五	江戸ノ六百二	六百五	江戸ノ六百二(新補評判)	六百五	江戸ノ六百二(発端部新補)	六百五
江戸ノ六百三	六百六	江戸ノ六百三	六百六	江戸ノ六百三(新補評判)	六百六	江戸ノ六百三(発端部新補)	六百六
江戸ノ六百四	六百七	江戸ノ六百四	六百七	江戸ノ六百四(新補評判)	六百七	江戸ノ六百四(発端部新補)	六百七
江戸ノ六百五	六百八	江戸ノ六百五	六百八	江戸ノ六百五(新補評判)	六百八	江戸ノ六百五(発端部新補)	六百八
江戸ノ六百六							

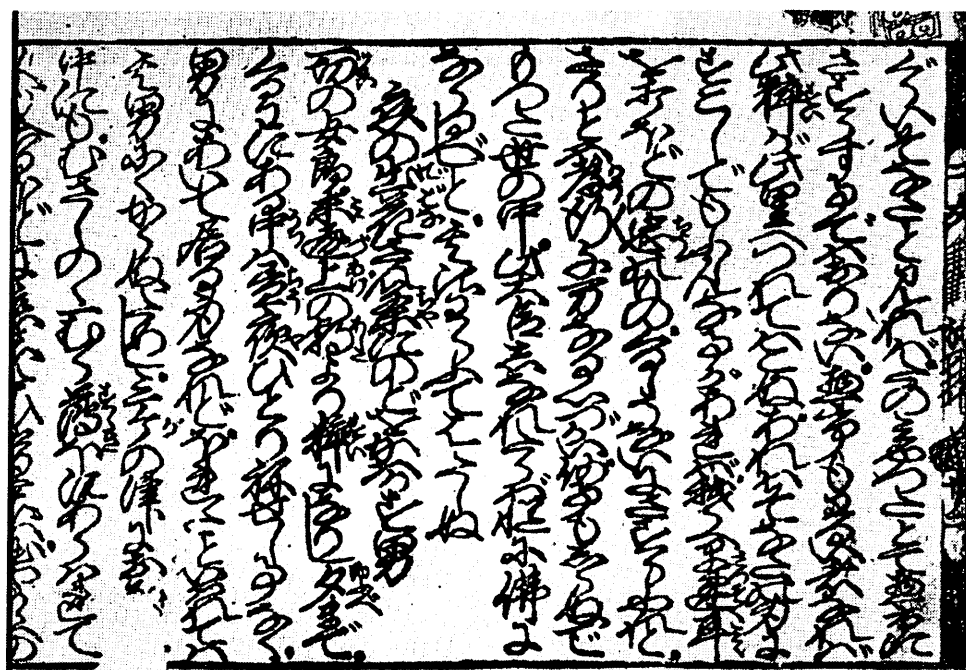
四行を補刻したのである（第一図・第二図）。この際前章評判末は巻軸白上上吉の市村竹之丞で評判に七行を当てている。彼は市村座座本でもあり評判を三行縮める事は出来ぬであろうが、その気ならばそれ以前で役者一名宛一行で三行の短縮は可能であろう。それをやっていない事は、この時点で『懷中洗濯』原板木を温存し、他日なお第一章を復元した形での再利用を考えていたもののように思われる。なお板心は『懷中洗濯』は「二女 江」で「女」は題名を略し、「二・江」は第二巻目江戸之巻の意であるが、『髪透油』は題名に野傾を称し、この年八文字屋では其蹟と確執中のため役者評判記を単行で出せぬ事情があったような事と、浮世草子刊行点数を見せかけでも増す意図で、前に役者評判、後に遊里を扱う小説という形をとって出したので、前の板心には「二の替江」とし、対して「二女 江」は『髪透油』の第二巻で江戸の遊女を扱う巻として通用させて手を入れていないのである。この箇所を『卵子酒』でもとの『懷中洗濯』の形に戻している。温存してあった第一章からの板木を用いたらそうなるわけである（第三図）。

次は同巻末丁である。最後まで男たちの心をひきつけておき、別の深間の男に身請けされた女郎が鼻毛の長い男たちへ残した手紙の末尾に当る。第四図は『懷中洗濯』、第五図は『髪透油』である。評判記は三都分を各一卷宛分売もするようで各巻末に刊記のある事が多いが、『髪透油』もそのような売り方を予定したようでこの末尾に「八文字屋八左衛門板」と入れたのである。そのために手紙の宛名などを改刻し上方に移して八文字屋名を入れる余裕を作ったのである。第六図は『卵子酒』の

同一箇所（但し丁付の四が三に改まっている）で、各巻に八文字屋名を入れる必要はないので削ったが、宛名などの位置は復元せずとも支障なしとしたのであろう。

第七図・第八図は『卵子酒』大坂之巻の卅三丁裏卅四ノ七丁表、卅四ノ七丁裏卅八丁表である。『懷中洗濯』大坂之巻伝存本未詳ながら写本と比べると卅四ノ七丁表初三行、卅八丁表初四行は改刻である。そこで他巻の例よりして『髪透油』のその前後を見ると、『卵子酒』卅四ノ七丁表は『髪透油』（遡って『懷中洗濯』）の卅四丁表裏と卅五丁初三行を縮約して卅四ノ七丁表の初三行分を改刻、この痕跡は卅四ノ七丁表の匡廓の切れ目に明かである（第九・第十図を第七図と比べられたし）。同じようにして第十一―十三図に見るように卅六丁表より卅七丁裏・卅八丁表四行に至る本文一丁余を縮約、挿絵一丁分をも除いて卅八丁表四行を改刻して前後をつなぐと第八図になるのである。『卵子酒』で卅四ノ七という丁付が付けられたのもこれに応じる処理である。これは多分『髪透油』から『卵子酒』刊行までの数年間にこの数枚の板木が失われたのであろう。

『懷中洗濯』風流之巻は伝存本未詳であるが、『浮世草紙』第三巻に収められた「男色薬人形帰り新座」翻刻によりその内容がうかがえる。その解説によれば翻刻のもとになったのは稿本というが、むしろ『懷中洗濯』原刊本の写本のように思われる。この翻刻と『卵子酒』を比べてみると、翻刻にはないが目録は新挿と思われ、第一章題を「好色薬人形帰り新座」に改める。この第一章は『懷中洗濯』で新たに執筆のもの



(第一図) 左右 「懷中洗濯」 江戸之巻廿二ウ廿三オ (阪大本)

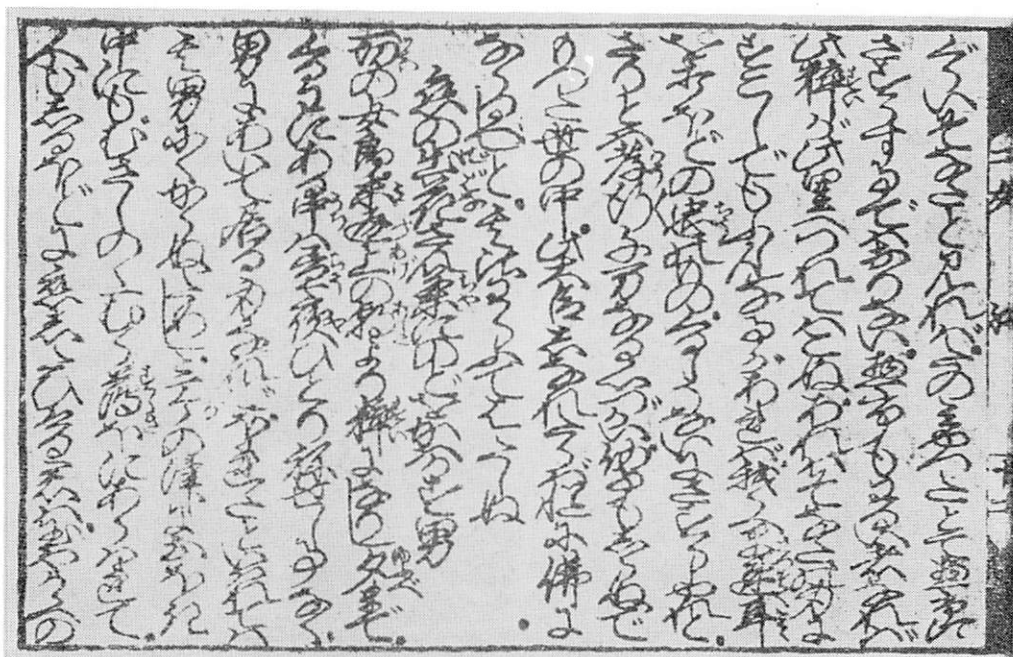


(第二図) 左右 「髪透油」 江戸之巻廿二ウ廿三オ (芸大本)

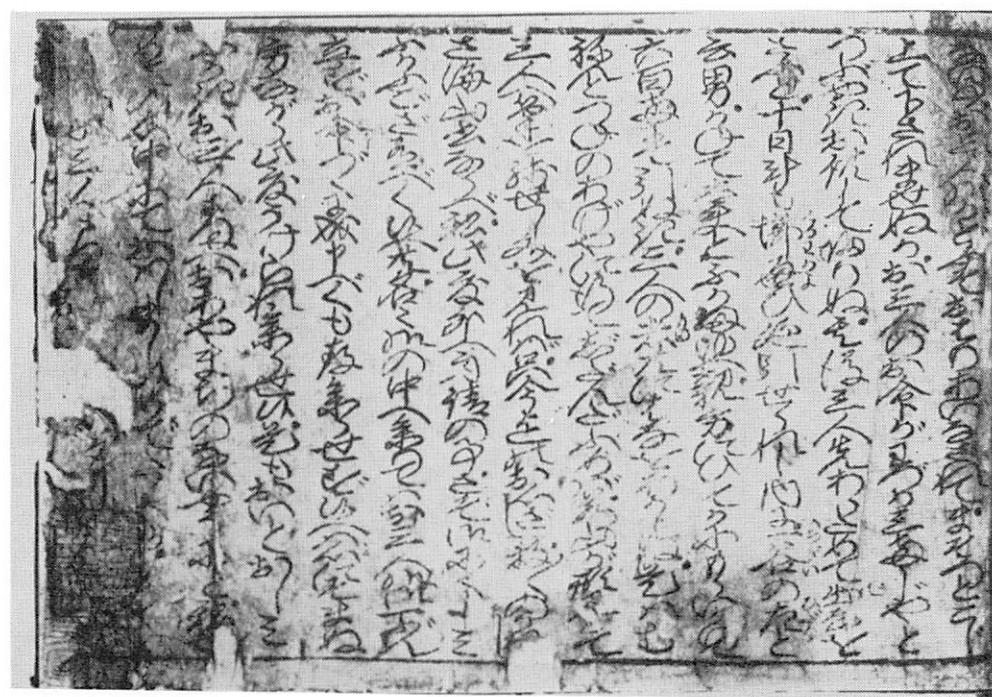


その傍といふ女は、讀みおき、  
末の役者、村室と云ふ、  
り、すも、衣、  
基衣、  
是、上、  
ま、と、  
介、  
か、  
切、  
金、  
め、  
は、  
わ、  
う、  
さ、

その傍といふ女は、讀みおき、  
末の役者、村室と云ふ、  
り、すも、衣、  
基衣、  
是、上、  
ま、と、  
介、  
か、  
切、  
金、  
め、  
は、  
わ、  
う、  
さ、



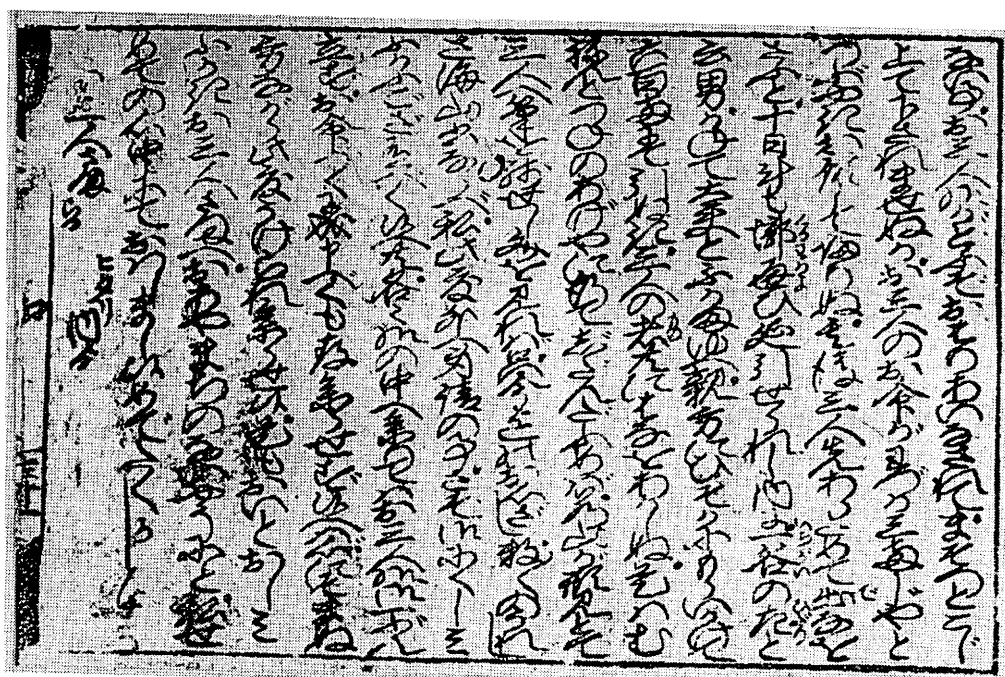
(第三回) 左右 『卯子酒』 江戸之卷廿二ウ廿三オ (東北大本)



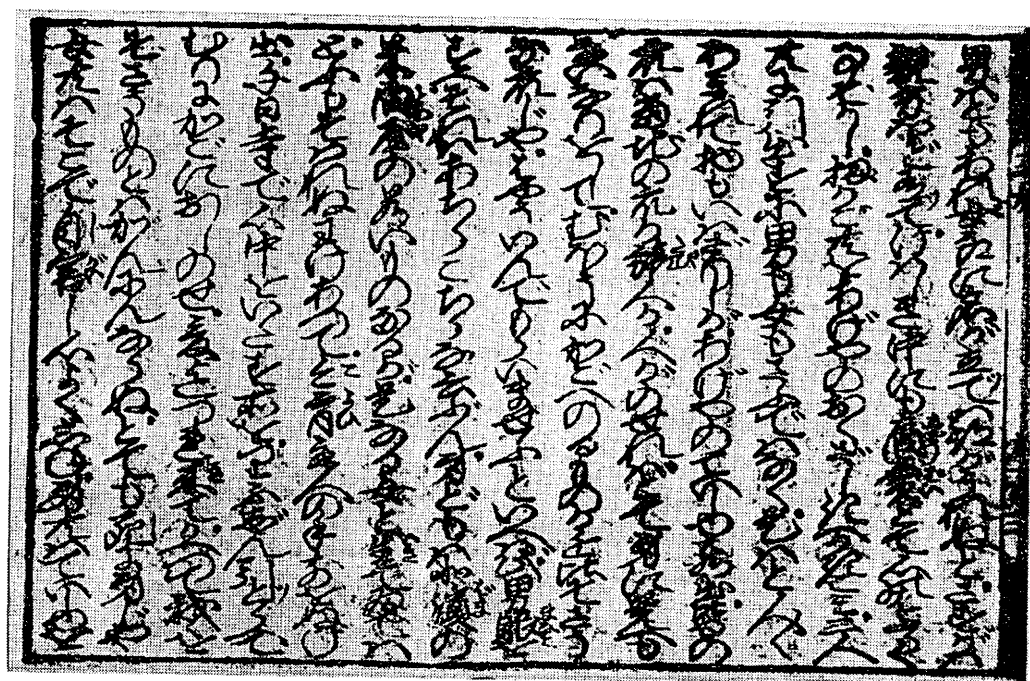
(第四回) 『懷中洗濯』 江戸之卷四十一オ (阪大本)







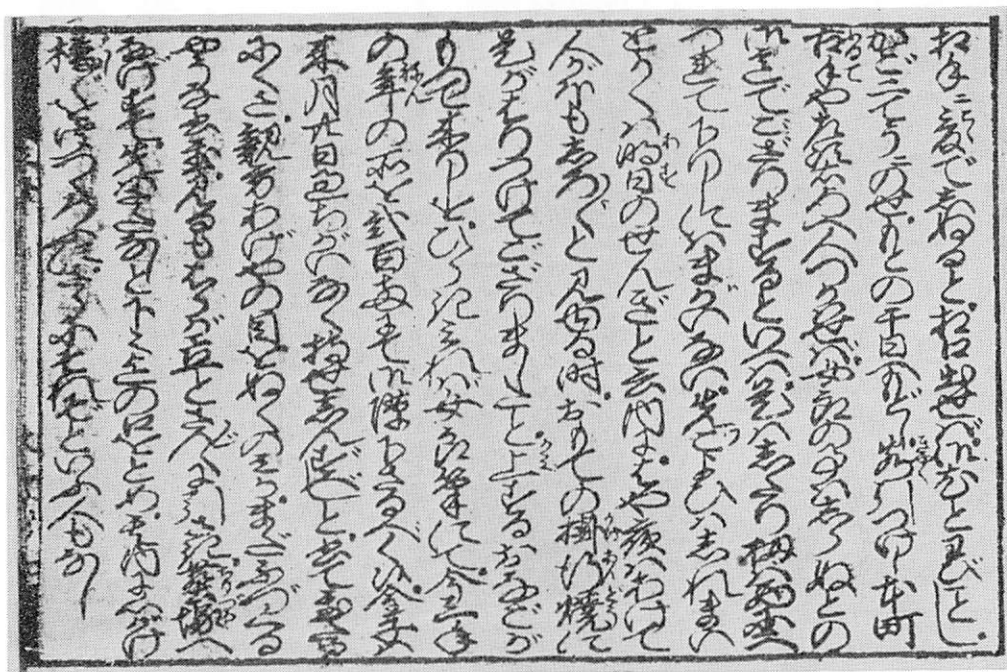
(第六図) 『卯子酒』江戸之卷三十一オ (東北大本)

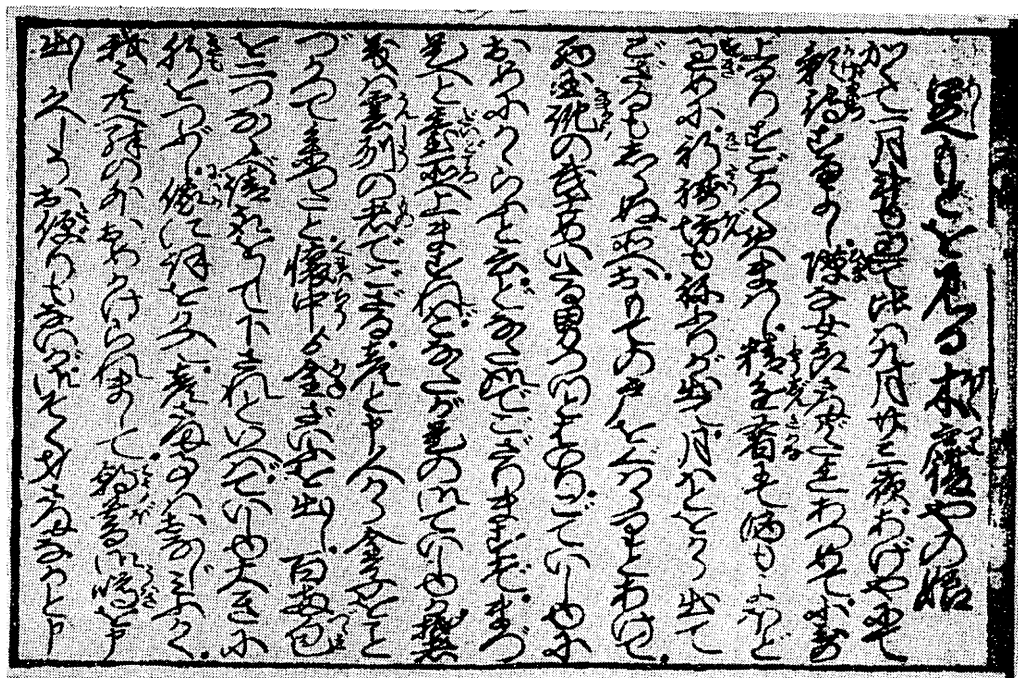


(第七図) 左右 『卯子酒』大坂之卷卅三ウ卅四ノ七オ (東北大本)

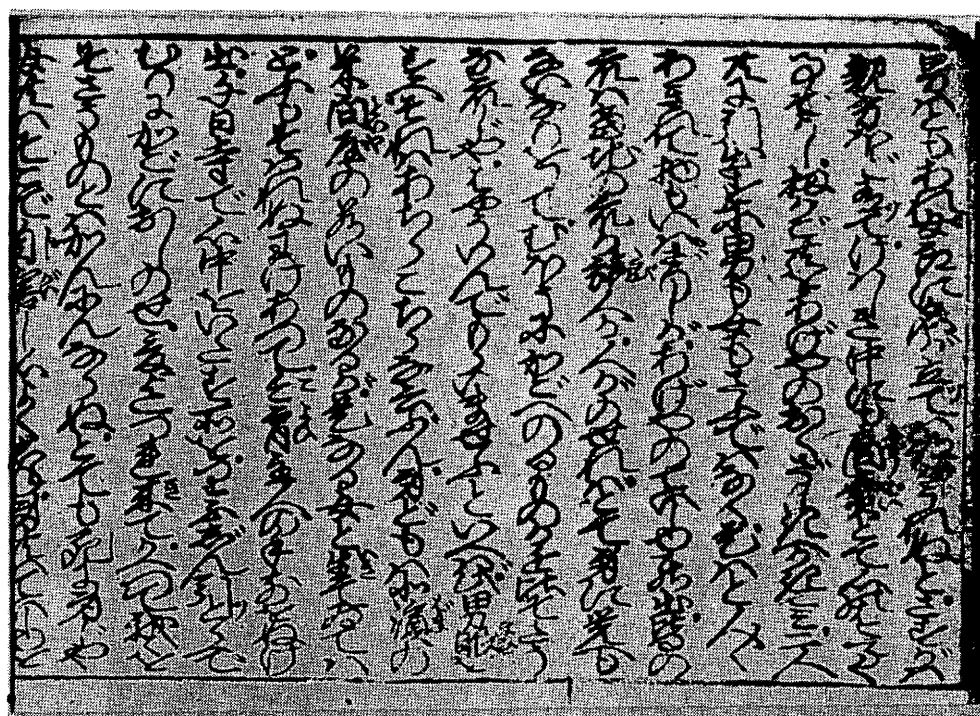
かとも思うが疑問がある。第二章は『卯子酒』にはとられていない。第三章は前掲表に示すように『役者口三味線』京之巻開口の冒頭（五丁表）より十一丁裏までを挿絵を含めて転用、章末の結びを改めている。第四章は『口三味線』大坂之巻、第五章は何か評判記開口の転用かと思うが未詳、第六章は『口三味線』京之巻の転用で末尾を改めているが、『卯子酒』は新挿の京之巻初の発端に応じた結びをここにおくので、またその改補部分の新挿のものに改める。即ち『卯子酒』風流之巻は第二章を捨てたのに応じた目録新製と、末章末尾半丁の新挿以外はほぼ『懷中洗濯』のままという事になる。そこでここでは『卯子酒』板木によって『懷中洗濯』風流之巻の板木修訂を問題とする事にする。

第一章を新挿かと思うが疑問ありとしたが、この章は『けいせい色三味線』において登場の傾城買の心玉の乗移った藁人形が唐土より再び長崎に送られ、息子の色遊びの妨げをする親仁を平げようと上方に上るという話である。ところが十七丁表（本文丁付は三に始まり六ノ十五という飛丁をつくる）は第十四図のように三行目から継がれている。その裏は第十五図右で本文末六行ほどの余白にカット様の絵を入れる体裁は丁度この頃の役者評判記開口末に見られる。この十七丁表裏が既刊評判記開口末の板木転用とすれば、末の絵は前にあわせて藁人形姿や文句を修訂した事になる。このような手間をかけて一丁弱の板木を生かすために前五丁分を新補するというのは不自然ではなからうか。既刊の板木五丁分を生かし、末尾を切って次章へつなぐために一丁弱を新補したか、この一丁弱も既刊評判記開口末を転用したかという事ではなからうか。





(第八図) 左右 【卯子酒】 大坂之卷卅四ノ七ウ卅八オ (東北大本)



(第九図) 左右 【髪透油】 大坂之卷卅三ウ卅四オ (芸大本)







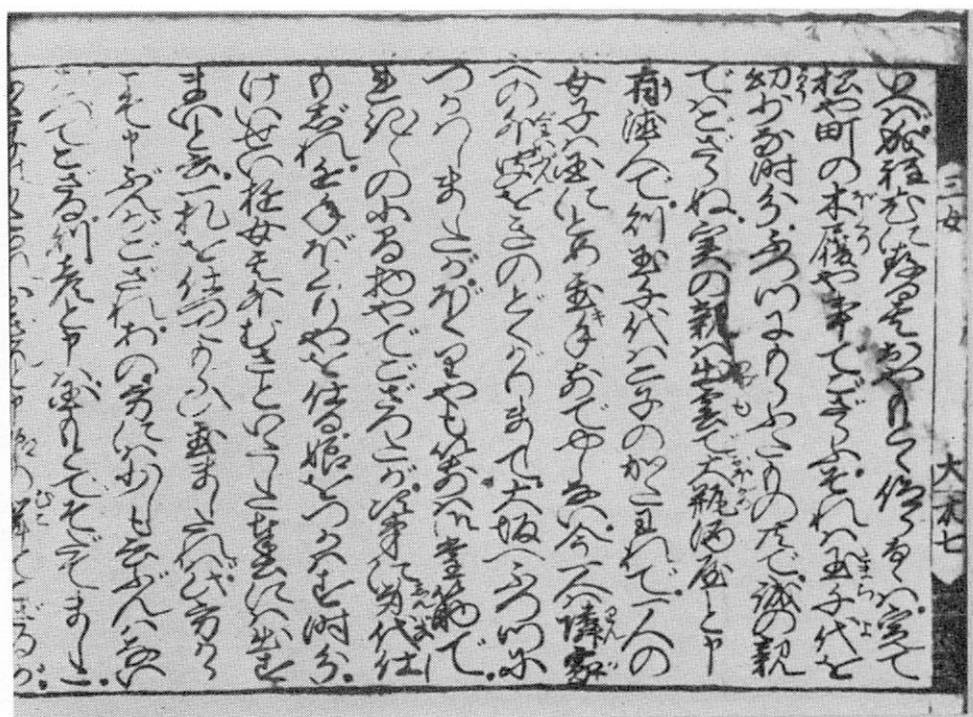


けりその終りなりわけの指しわづ  
物にけりの上にていかにそへけりは  
多岐なりとて用せしむる女とのあはれ  
にまでござるまじきといふもその様を  
つてもちりといふまゝの光りといふ  
まじき留めをせんとていふまゝの  
分りもあつてとる由なりとの様は  
もつていふまゝの光りといふまゝ  
りもあつていふまゝの光りといふ  
の年のやうな女をいふまゝの  
本日は日曜日なりとていふまゝ  
いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの

いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの  
いふまゝの光りといふまゝの



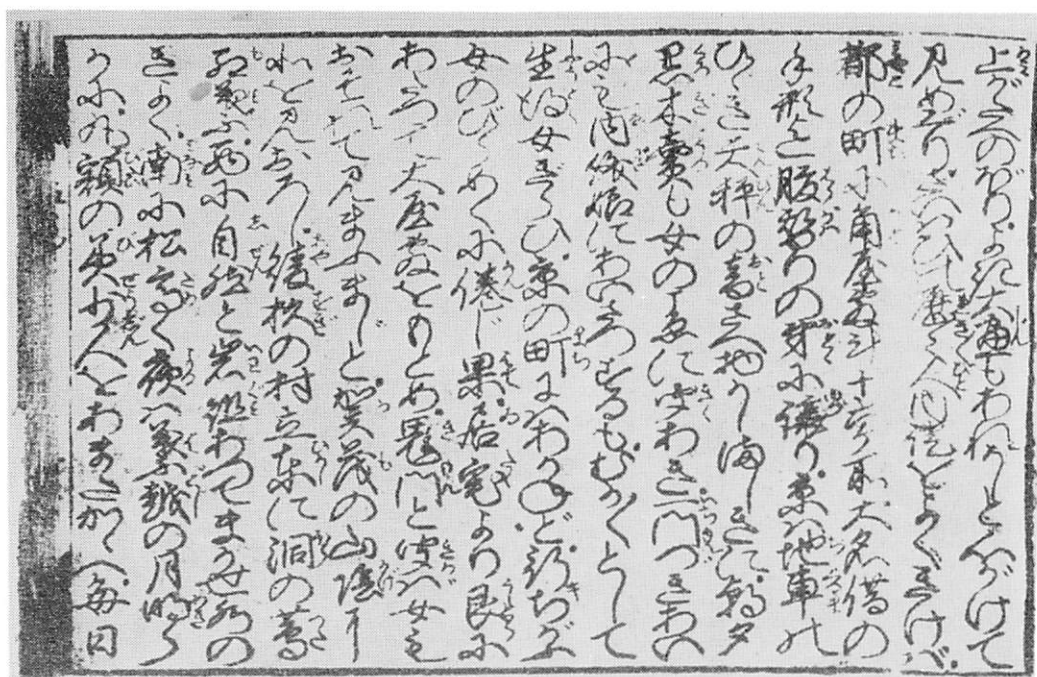
(第十二回) 左右 『髪透油』 大坂之卷卅六ウ卅七オ (同)



(第十三回) 左右 『髪透油』 大坂之卷卅七ウ卅八オ (同)







(第十四図) 『卯子酒』風流之卷十七オ (東北大本)



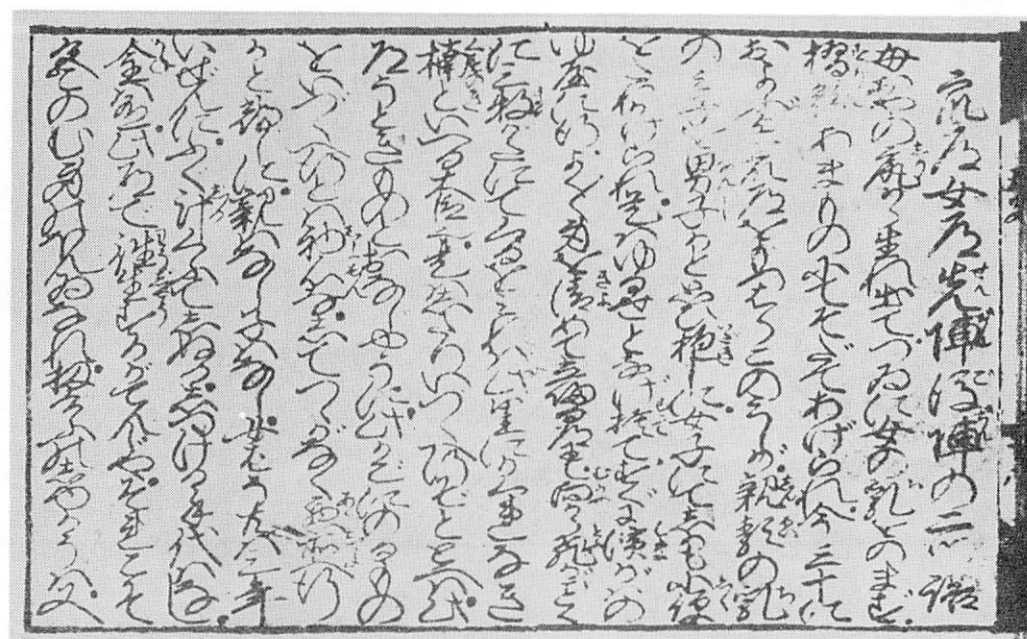
(第十五図) 左右 『卯子酒』風流之卷十七ウ十八オ (東北大本)



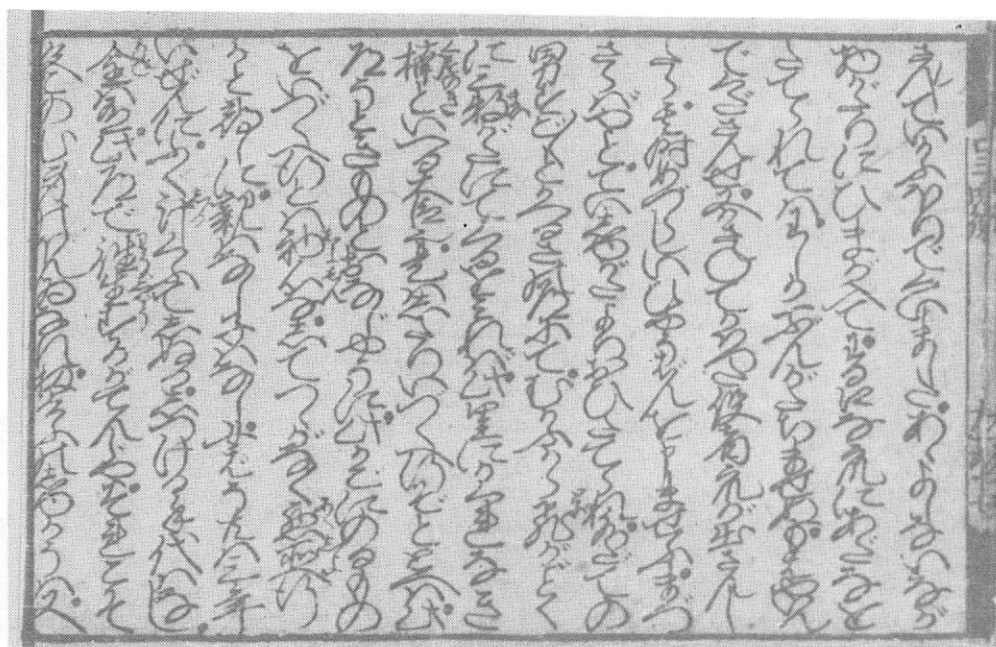
(第十六図) 『口三味線』大坂之卷六十七オ (演博本)



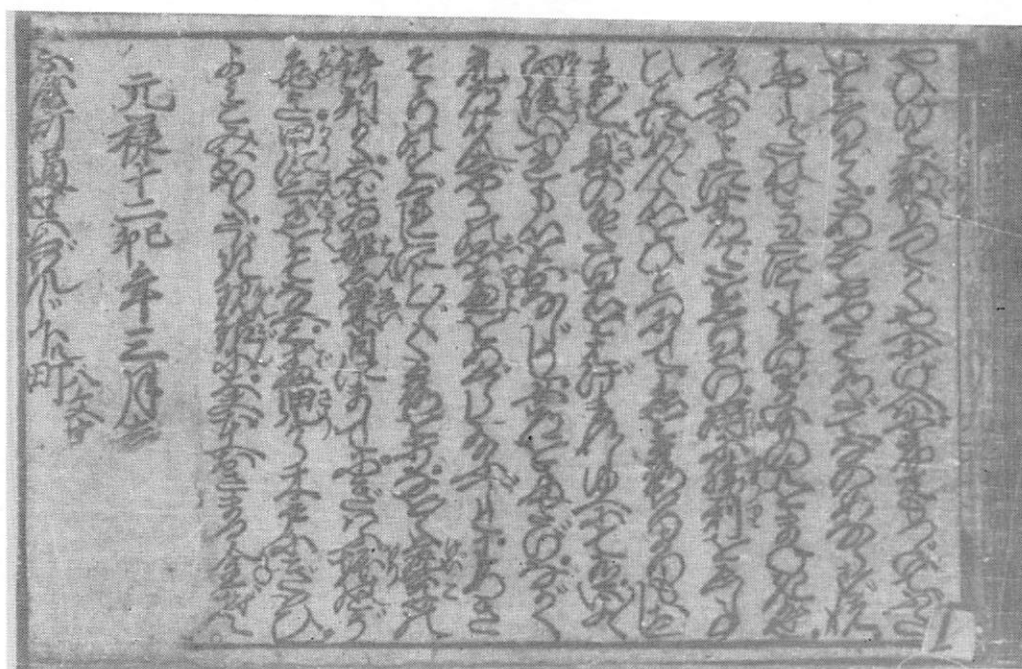
その次十八丁表（第十五図左）は第十六図と比べて明かなように「役者口三味線」大坂之巻六十七丁表の挿絵の人物名等を削り、中央の文句を改刻して用いたのである。左より二人目の煙管をくわえる男の右上の屏風の縁にもとの人物名の囲みを削って修正した跡が明かで、この挿絵が覆刻でなく原板木の修訂である事を示す。その裏は第十七図と十八図を比べると八行目からが「口三味線」大坂之巻六十七丁裏以下の板木転用で、前半七行を継いで新作をよそおうのである。これも匡廓に継目が見える。この「口三味線」板木利用は廿二丁裏八行目まで続き九行目以下下丁末まで七行を改補する。これも第二十図と比べ第十九図右に明かなように継目が見える。次章初は十九図左であるが、明かに章題と本文の間に継目がある。これも既刊評判記開口の板木の再用と思われる、章題を改めたものであろうが評判記名は未詳。本文二丁半の末は七行目と八行目の間に継目があり（第二十一図）、末尾を改訂している。その裏は第二十二図右の挿絵であるが、その前に位置する右本文にはやん酒の事がない。本文にない挿絵を新製する事は考えられぬから、これも右既刊評判記の挿絵で、本文末尾を縮約変改したためにやん酒の事が落ちたのであろう。その左は第二十三図と比べて明かなように「口三味線」京之巻五十八丁表の挿絵の板木を修訂して用いている。縁側の線、右隅の柱や敷居等の線、左上の階段の線などに改刻の跡が残っている。その裏はやはり四行目以下が「口三味線」京之巻五十八丁裏以下に当る。初三行を継いで補い新作をよそおうのである。そして巻末は第二十四図右と二十五図を比べてわかるように「口三味線」板木四行目までに新補分を継ぐ。



(第十七図) 『卯子酒』風流之巻十八オ（東北大本）



(第十八図) 『口三味線』大坂之卷六十七ウ (演博本)



(第二十図) 『口三味線』大坂之卷七十一オ (演博本)



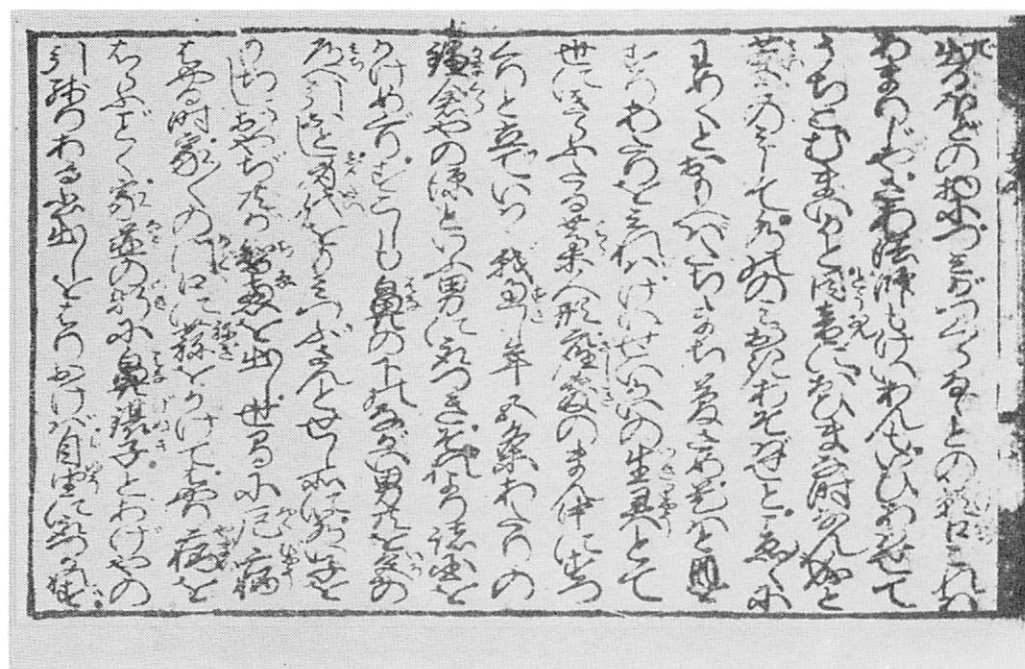






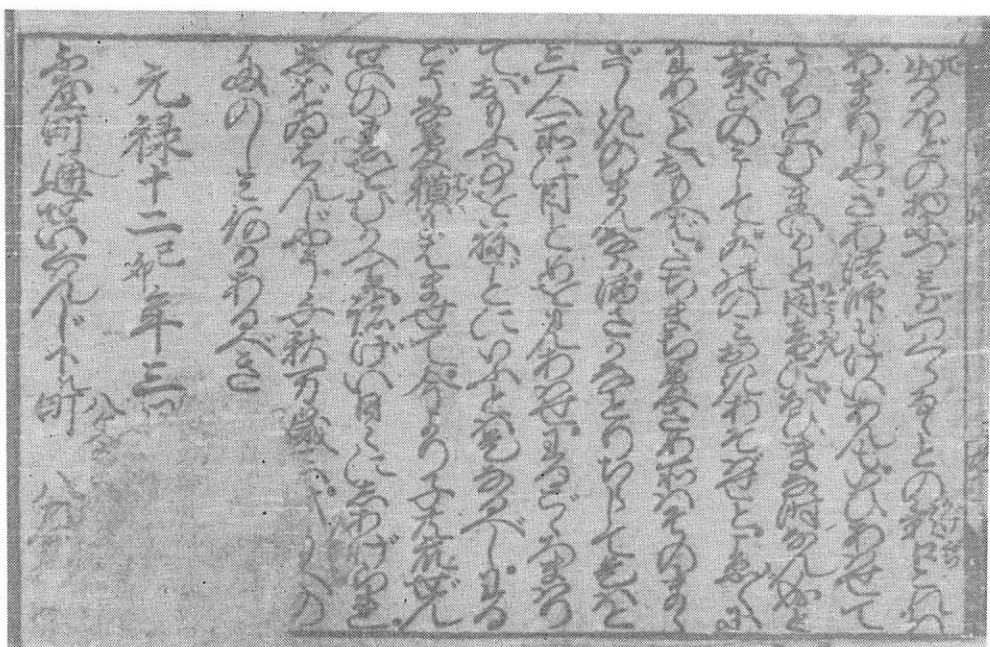


(第二十二図) 左右 『卯子酒』 風流之卷廿五ウ廿六オ (東北大本)



(第二十四図) 左右 『卯子酒』 風流之卷卷末 (東北大本)





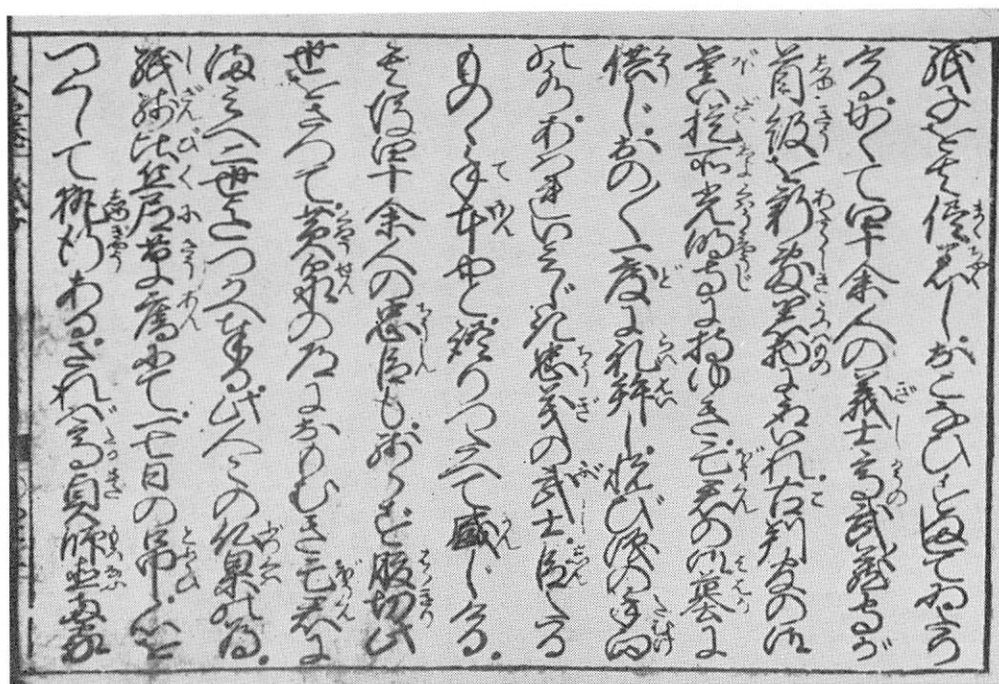
(第二十五図) 『口三味線』 京之卷六十一ウ (演博本)

そして翻刻によれば『懷中洗濯』では次丁表までで終結に至るのであるが、『卯子酒』はこの末半丁を京之巻発端に依じて改刻している。第二十四図左がそれに当るが、右の丁の匡廓は『口三味線』のそれ、対して左は浮世草子判の匡廓で、新補のこの半丁は第四巻までの匡廓に合せて作製された故の差異であろう。

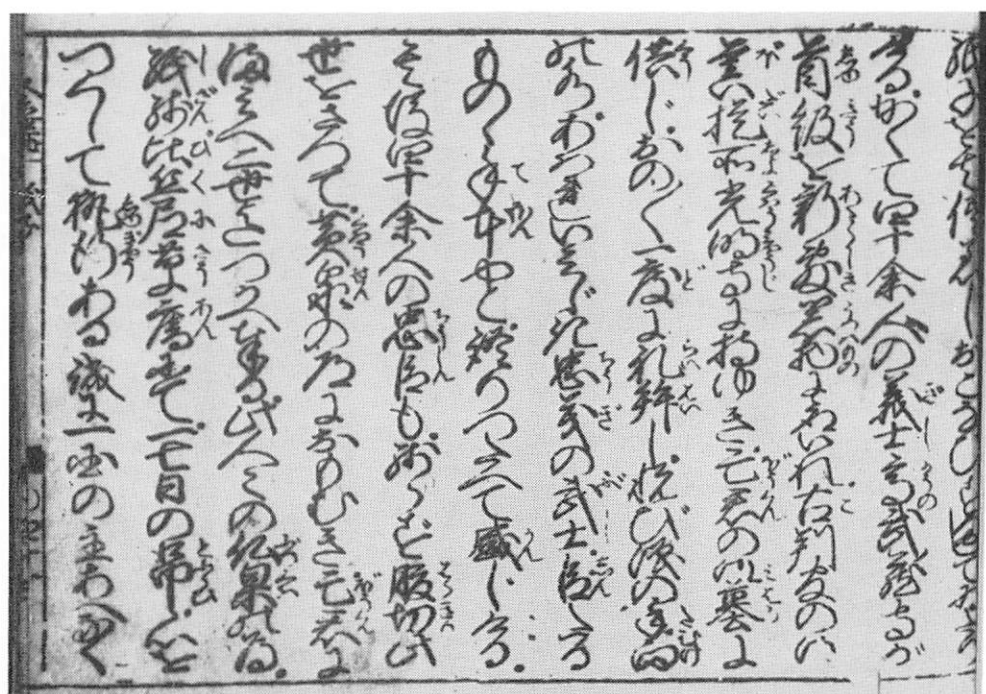
宝永七年閏八月刊、八文字自笑の序を有するが江島其磧作八文字屋板の『けいせい伝受紙子』横本五巻五冊も、板木にさまざま細工された本である事拙著年表に述べた通りであるが、その問題箇所を補足を加えつつ御覧に入れる事とする。

まず『伝受紙子』には五之巻第五章「武勇の働末の世の咄の種」の本文中四十一丁表の末行が「されば高貞師直両家」とある本(第二十六図)と「誠に一国の主あへなく」とある本(第二十七図)がある。前者は東洋文庫A本、後者に同文庫B本・国会図書館本等がある。国会本は改裝合綴一冊本であるが、各巻の奥、即ち一之巻の『傾城禁短氣』予告、二之巻の『風流色雛形』予告、四之巻の『諸色内証鑑』先月より出の既刊広告、五之巻に一之巻と同じ『禁短氣』広告を残しており、初印本の姿をとどめているようであり、東洋A本も改裝合綴一冊本であるが右の奥はすべて除かれている。ただ一之巻奥の『禁短氣』予告にはその前に本文末丁末に四行「▲各々様<sup>江</sup>申上ます／傾城禁短氣<sup>けいせいきんたんき</sup>。説法者<sup>せっぽうしや</sup>の散切<sup>さんきり</sup>。段々<sup>だんく</sup>のびたいひわけの髪<sup>かみ</sup>。急<sup>きう</sup>とき申すニ付。／御しらせのためこ、にしるす」とあるが、東洋A本はこれをとどめており、もともと『禁短





(第二十六図) 『伝受紙子』五之卷四十一オ (東洋本A)



(第二十七図) 同上 (国会本)

「氣」予告をその奥に有してしたのであろう事を示す。即ち東洋A本も初印本とすれば前述の五之巻の本文に違いがあるのは不審であるが、これは林望氏が指摘される（八文字屋刊行浮世草子書誌解題稿（一）―斯道文庫論集十九輯）ように国会本は五之巻のみ後修本の取合本である事による。その判断の根拠は林氏指摘のように五之巻板心に書名等削去の丁がある事である（後述参照）。即ち五之巻の前述本文の差は「されば」云々を埋木で「誠に」云々と何時の時に改変されたのである。その改められた時期・理由は明かでないが、一つの憶測を記してみよう。

国会本は初印本とみられる――四之巻については、一・二・四之巻の奥を残し三之巻はない。これは一・二・四之巻の本文が丁裏で終わっているのに、三之巻は丁表で終わっているのによる。即ち三之巻は本文末が裏表紙に貼付された形になっていて、予告を入れる余地がなかったのである。という事は現存国会本は四之巻までの初印本の表紙以外の全容を伝えていという事である。それなら五之巻の奥は四之巻までのものの改装時の流用ではなくて、取合せ後修本五之巻に付されていた奥付が残されたものと考えられる。初印本のものともみられる一之巻の「禁短氣」予告には末に「右の本近日ニ出来申候」云々とあるが、五之巻の「禁短氣」のそれは国会本はこの末行が破れて「申候」以下しか見えない。八文字屋の広告にあつては「近日ニ出来申候」の予告を「近日ニ」を削って既刊広告とするような事が行われるので、この五之巻の「禁短氣」広告も初印本一之巻の予告と同一板木で刷っていても、右の末行を確めねば予告が既刊広告かは断言出来ぬのであるが、予告であれば「禁短氣」

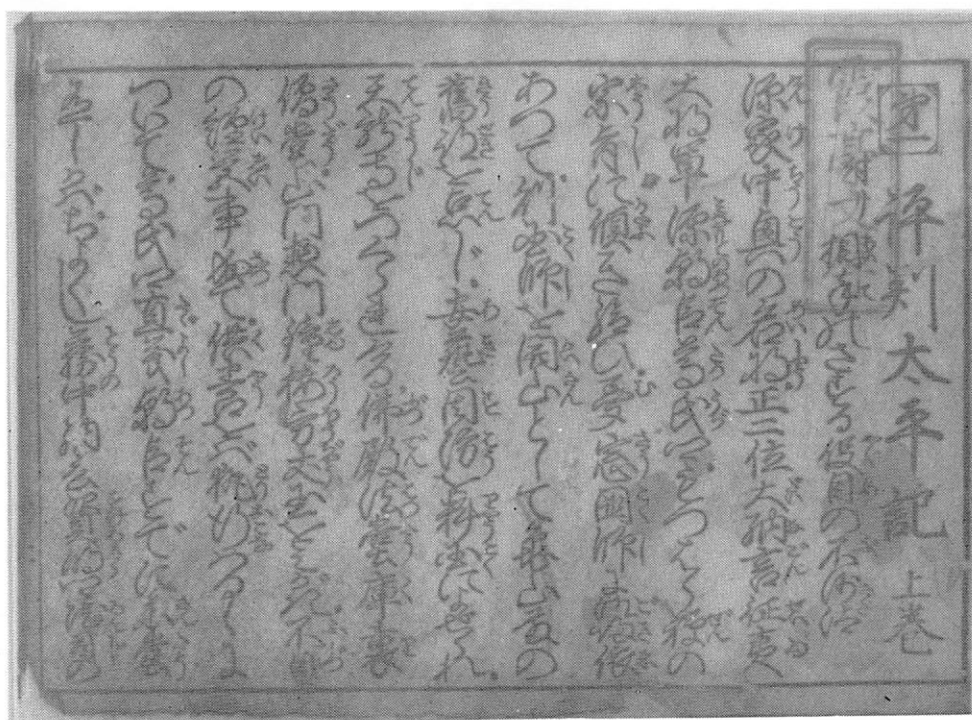
刊行の宝永八年四月以前、既刊広告であればそれ以後、そしてこの広告の有効な「禁短氣」刊行後一二年位の間と考えられ、後修本の刊行時を考える一つの手掛りになろう。しかし問題はなお面倒で、国会本五之巻に見るような後印本刊行時と「一国の主」云々の埋木修訂と同時であったとは必ずしも断言出来ぬのである。

それは五之巻後修本には板心部に削去のある丁とない丁があるが、「一国の主」云々の修訂のある丁には板心部の削去はない。即ち板心部の削去を行う必要の生じた時にはこの「一国の主」云々の語句を含む第五章はその改修には無関係であった事を示している。後述のように「伝受紙子」は一度一部の巻章を除いた別題の本として仕立てられ（その時に利用部の板心部削去がなされ）、また「伝受紙子」として再生した。

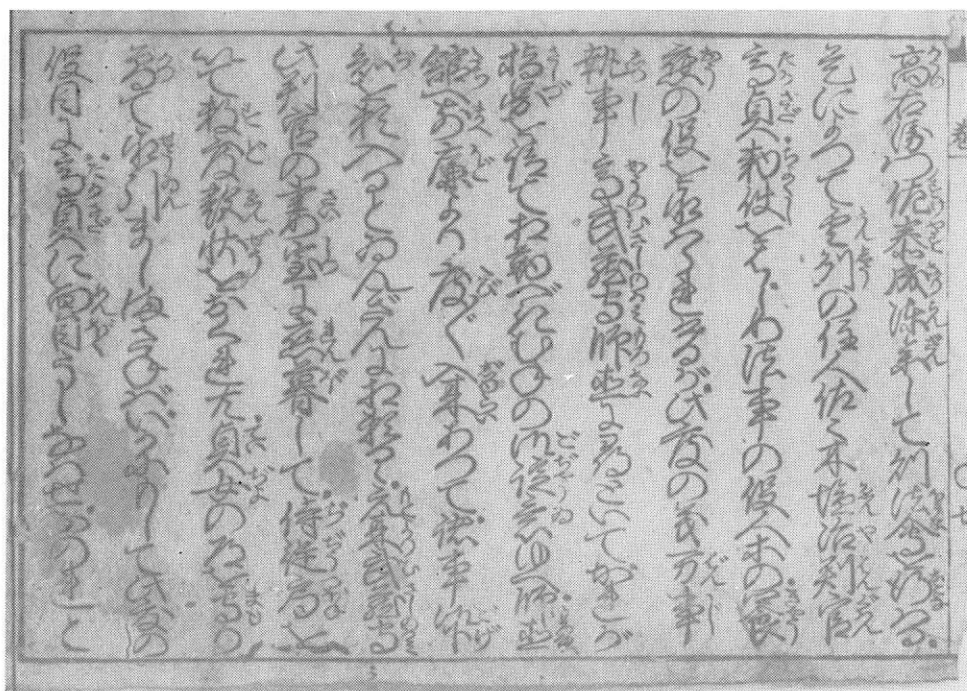
国会本五之巻はこの再生本である。国会本五之巻後修本の刊行が「禁短氣」刊行とあまり隔らぬ正徳初年と考えられるなら、右の別題本の印行をはさんで「伝受紙子」初印本刊行後すぐにか、別題本より再び「伝受紙子」に復する時即ち右後修本の出た時の何れかに「一国の主」云々の修訂が行われたのであろう。その何れという事は定め難いけれど、私は初印本刊行直後かと考える。本書は赤穂浪士一件を趣向の中心の一とするが、宝永七年九月十六日に浅野長矩の弟大学長広が五百石で召出されている。浅野長矩は五万三千余石の大名であったが、大学は五百石である。大名家としては消失したが浅野の家は存続した。「両家」が亡びたというを「一国の主」が亡びたとこの故に改めたと考えるのである。これが「伝受紙子」の第一次の修訂で、時期は初印本刊行をあまり隔てず、

早ければ宝永七年冬頃にも行われたのであろう。

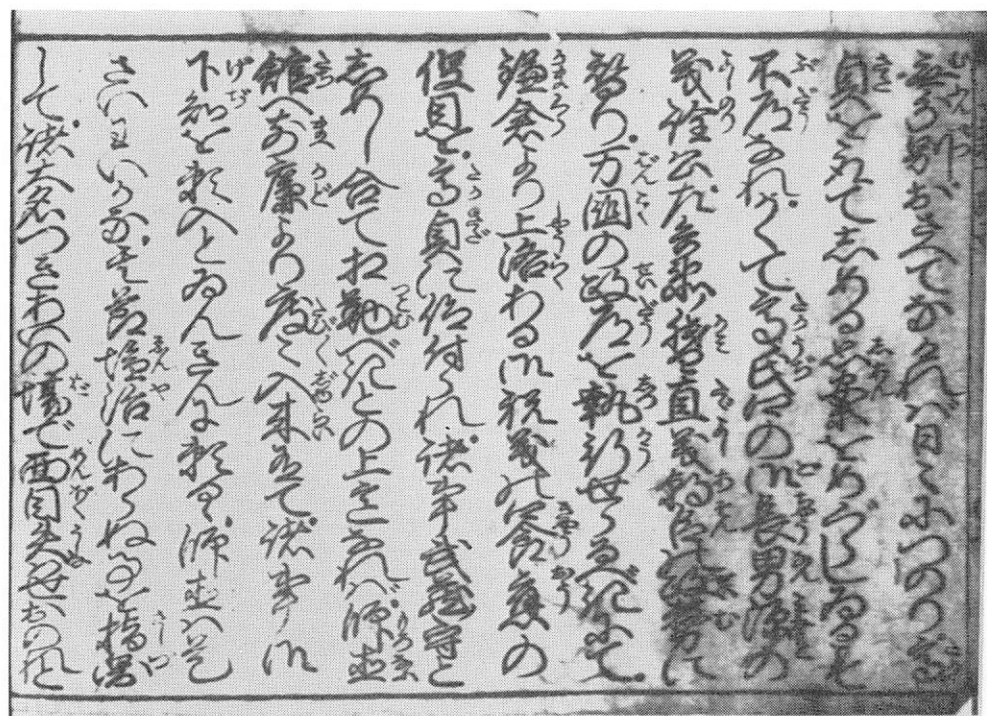
東京大学附属図書館霞亭文庫に『評判太平記』横本一冊がある。上巻のみの零本であるが、現状は序・目録がなく、巻頭「第一評判太平記上巻」とあり、板心は「巻」と丁数、この丁付は本文第二丁が「七」、以後八―十九、廿ノ卅―四十裏で終る。九裏十表、十四裏十五表、十八表卅三裏卅四表、卅八表と挿絵がある。この巻頭（第二十八図）と第一丁（七）裏第二丁（八）表の写真（第二十九図）を掲げる。第三十図はこれと丁付を同じくする『伝受紙子』の一之巻七丁裏八丁表である。即ち『評判太平記』上巻は『伝受紙子』の初頭七丁裏（第一章全部と第二章初一丁）までを除き、それを縮約した冒頭一丁を新補して新板めかした本なのである。以後挿絵もそのまま用いているが、原第二章を第一とした結果、原第三―五を第二―四に埋木で改めている（第三十一・三十二図）。また題名と巻編成を改めたために板心の「一之巻紙子」の「一之」[紙子]を削去したのである。本書中・下巻は伝存未詳であるが内容の見当はつく。林氏は前掲論考において『伝受紙子』の後修本の板木修訂について、巻一(イ)八―廿九（四十が正しい）板心削去、(ロ)三・四・五章題上の数字修訂―字体のみ異、(ハ)巻末「一ノ巻終」と『禁短気』予告（の前文というべきか）削去。巻二・三修訂なし。巻四(イ)第一章題修訂、(ロ)第四章題修訂―(イ)(ロ)とも文言殆ど初印本と同じ。(ハ)十ウ末行下半修訂、(ニ)四（三が正しい）―終丁板心削去―除十一―十三、(ホ)巻末「四ノ巻」削。巻五(イ)十二―四十一（四十が正しい）板心削去、(ロ)「一国之主」云々、(ハ)第四・五章題上の数字のみ入木修訂―但し数に変化な



（第二十八図）『評判太平記』巻頭七オ（東大本）



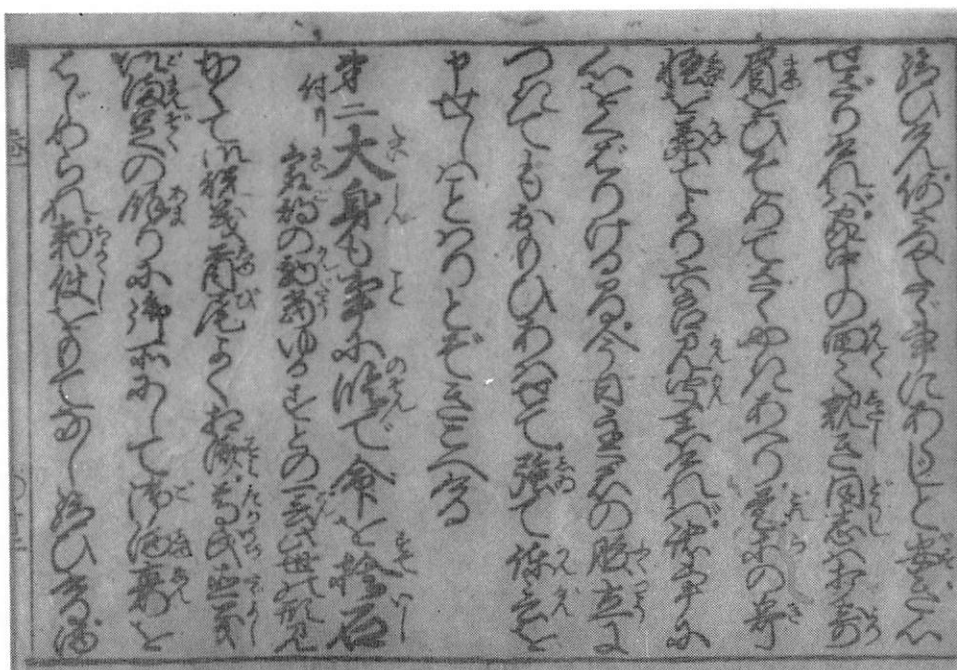
(第二十九図) 左右 『評判太平記』 七ウ八オ (東大本)



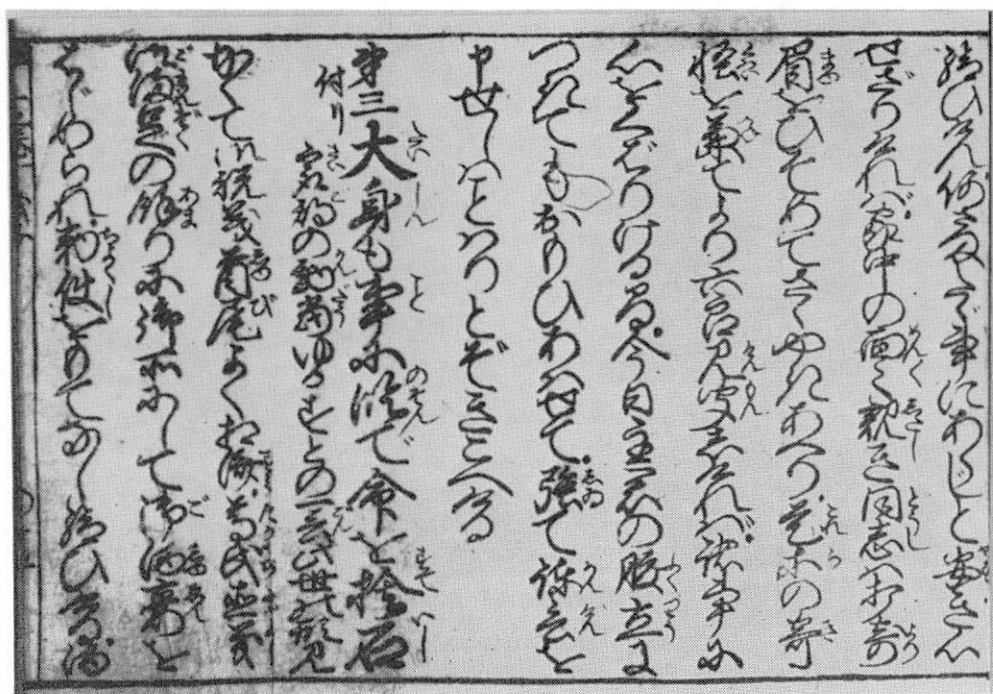
(第三十図) 左右 『伝受紙子』 一之卷七ウ八オ (国会本)



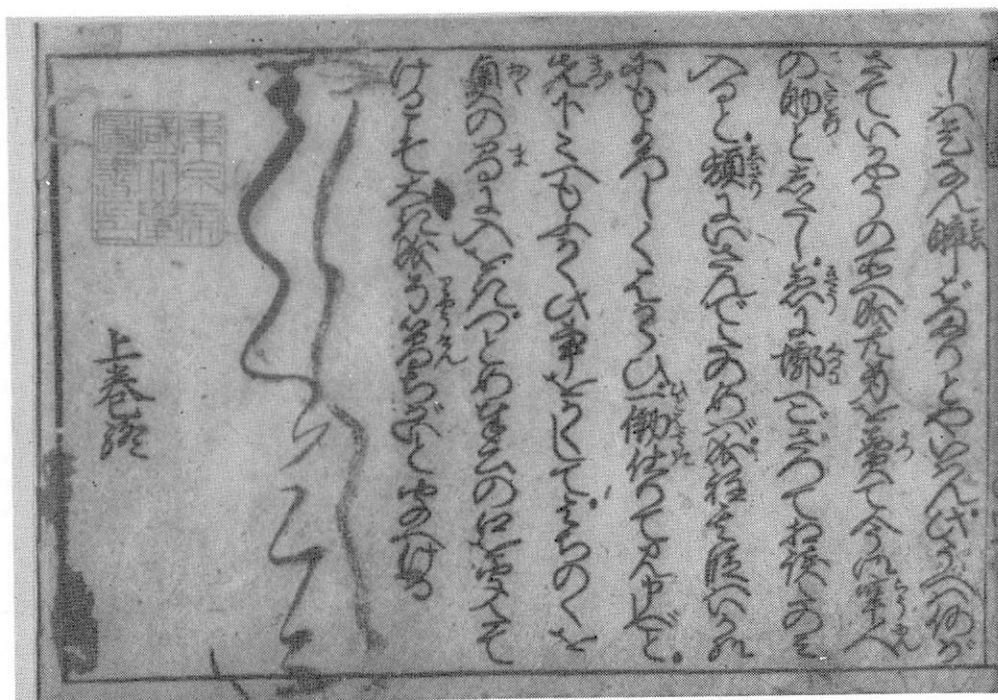




(第三十一図) 『評判太平記』上巻十二オ (東大本)



(第三十二図) 『伝受紙子』一之巻十二オ (国会本)



(第三十三図) 『評判太平記』上巻四十ウ (東大本)

し。としてかかる不可思議な修訂の意味未詳とされる。この一之巻(イ)の板心部に削去のある丁は即ち『評判太平記』に板木流用の丁に一致し、(ロ)も同書で章題上の数字を改めた章であり、(ハ)も同書が三巻の体をとったので第三十三図のように改めるために削去したのである。『伝受紙子』後修本なるものはこれを更にもとの『伝受紙子』にと復元したのである。除かれた七丁裏までを原姿に復し、章題上の数字をもとに戻し、巻末「上巻終」を除けば『伝受紙子』後修本の現姿になるのである。それなら『評判太平記』の中巻は原四之巻第一の章題を改め、原十一—十三丁は師直の臣野沢政右衛門の悪行の具体例列挙部分であるのでこれを除き、その前後の文章を続けるために十丁裏末行下半を改め、この縮約が以後の章立て・章題にも響き、上巻同様四章より成る。下巻は原五之巻の三—十一丁即ち第一章と、四十二丁以後末尾まで即ち第五章の途中以後の女主人公陸奥改め紙残比丘尼の『禁短気』予告の意を持たせた説法部分を除き、結末部を補う、ここでも四章に仕立てたので章題上の数字に手を加えるという形のものであったと思われる。これは内容的にいつて『伝受紙子』が赤穂浪士一件を女主人公陸奥の廓勤めと師直に請出されての内通を中心として仕立て、同時に宝永七年五月に伊勢桑名の松平家臣の野村増右衛門の処刑を当込む作であるのを、陸奥を中心とする廓での師直と大岸の接触や、大岸の一子力太郎と八重垣村右衛門の男色やを除き、師直への塩治判官の刃傷より家中離散、大岸らの復仇に陸奥内通をからませる程度の筋とし、野村一件を当込む野沢政右衛門に関する四之巻を生かし、多少の手直しをして中巻にするというものになったと

思う。そして正徳初年は赤穂浪士関係の浄瑠璃・歌舞伎・浮世草子が流行、外題・題名に「太平記」を称するものも多い。「評判太平記」は「伝受紙子」の好色物色を薄めて、この流行に乗じて新作をよそおい出したものであろう。野村増右衛門事件の当込を生かしているところから、同事件の宝永七年をあまり隔った時期の印行とは考えられない。そして「評判太平記」上巻冒頭は江島屋刊、あるいは其碩作かと思われる。「忠臣略太平記」（正徳二年秋以前刊）の冒頭を簡約したような文になっている。「略太平記」に続く正徳二年頃を「評判太平記」印行の可能性のある時期と考える。そして予定の所要部数調達後、あるいは好色味を除いたが故の不評から、また「伝受紙子」に戻したのが今日見られる後修本なるものであろう。

東洋文庫B本は改装合綴二冊、全巻この後修本であるが、「一国の主」云々の箇所は墨色を異にして薄く目立ち、国会本五之巻に比べて後年の印本である事を思わせる。そしてこの本には四之巻末に左の予告の写しとみられる墨書がある。

扱御断申上ケまする

付タリ恋と情につながれし鬼かげは／人をそこなふ恨のやいば

忠<sup>ちゅう</sup> 信<sup>しん</sup> 金<sup>かね</sup> 短<sup>たん</sup> 冊<sup>さく</sup> 全

井<sup>い</sup> 色<sup>しき</sup>と酒とにからまれし松かげは／人を助るまことのつるぎ

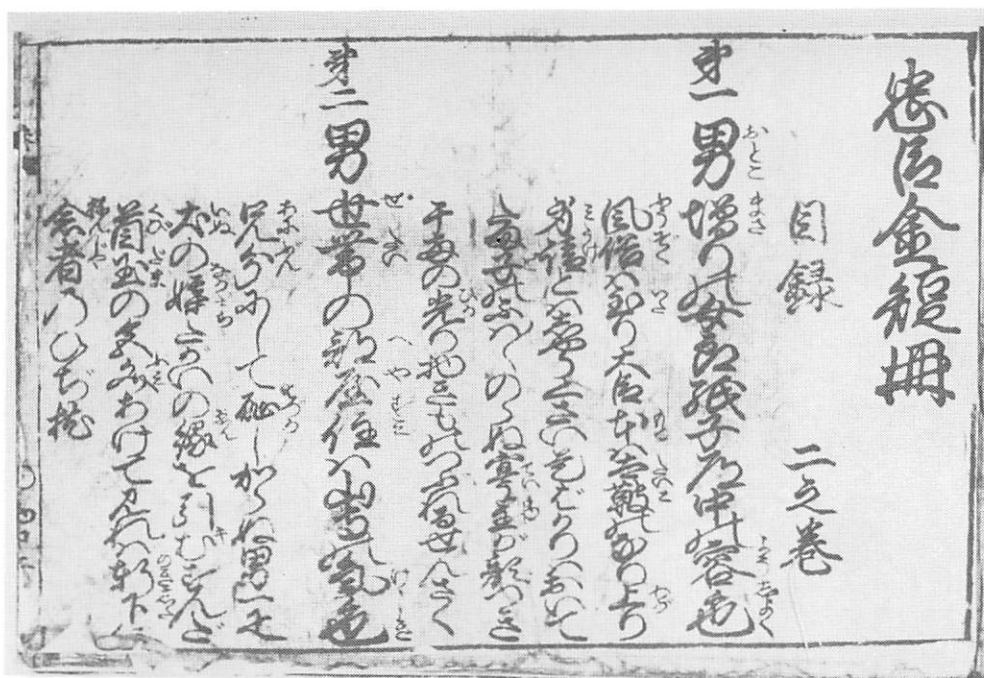
近日本出し申候御求／御覧可被下候 以上

正月吉日

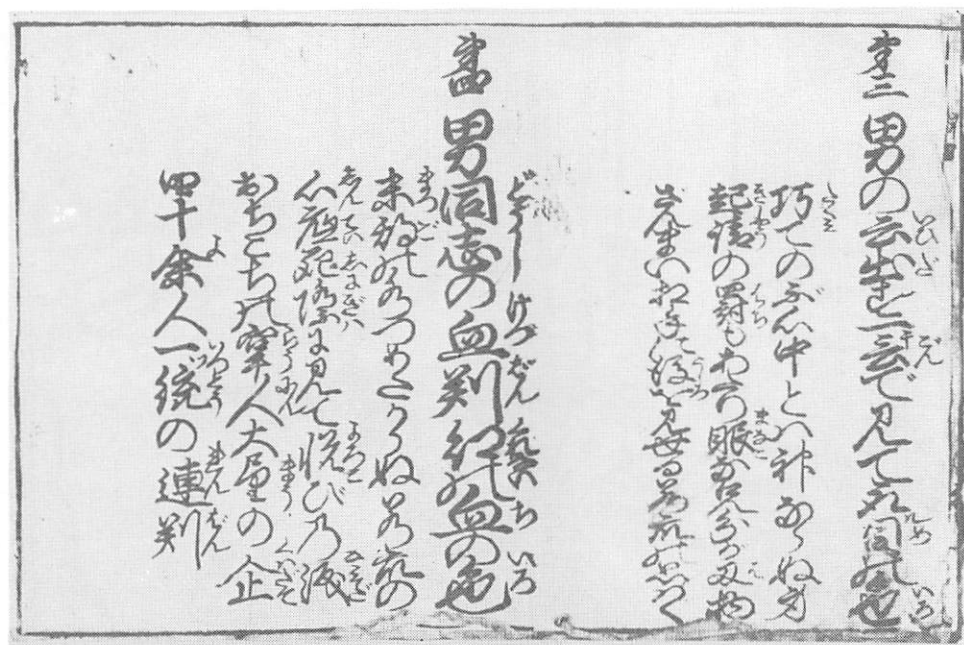
あるいは合綴前の姿として四之巻奥にこの予告があり、破損していたの

が写しとどめられたという事であったのかもしれない。そして浄瑠璃本の予告は八文字屋本では見た事がないから、これは次に述べる改題改竄本の予告と考えるのであるが、この予告は「伝受紙子」後修本が享保十七年十月一日より豊竹座上演の浄瑠璃「忠臣金短冊」の人氣に乘じ、その頃にまた印行された事を示すものと考ええる。

「伝受紙子」の改題改竄本「忠臣金短冊」は伝存本二・五之巻、享保二十年二月八文字屋と江戸の鱗形屋孫兵衛の相板で出されている（拙著年表ではこの刊記を見落している）。外題「忠臣金短冊」、目録題を埋木で改め（第三十四図）、二之巻については原第五章を除いているので目録を手直しし（第三十五・三十六図）、原第四章末は卅三丁裏末で終っているので手直しせず、末の余白に「二之巻終」と入れる。題名を改めたので女主人公陸奥の紙子姿を強調する事を避けて五丁裏六丁表の見開きの挿絵の陸奥の説明に「けいせい紙子道中」「けいせいでんじゅ紙子」とある「紙子」「でんじゅ紙子」の文字を削る（第三十七・三十八図）。五之巻については後述の本文改削に応じ原目録第四・五を一項にまとめて手直しし（第三十九・四十図）、卅四丁裏の挿絵に出る「紙子けいせい」の説明の「紙子」を削り、本文第五章の章題を削り二行分の文を補って第四章末を第五章につなぎ（第四十一・四十二図）、第五章後半の陸奥の難髪・説法部分の四十丁表以後末尾までを除き、ただ原四十一丁表の半丁を生かして二行目より十行目初めまでを残し、前後を改補して結末をつける（第四十三図と二十六・七図を比べられたし）。そして本文全体にわたり第四十一―三図でわかるように師直・武藏守等を横山・

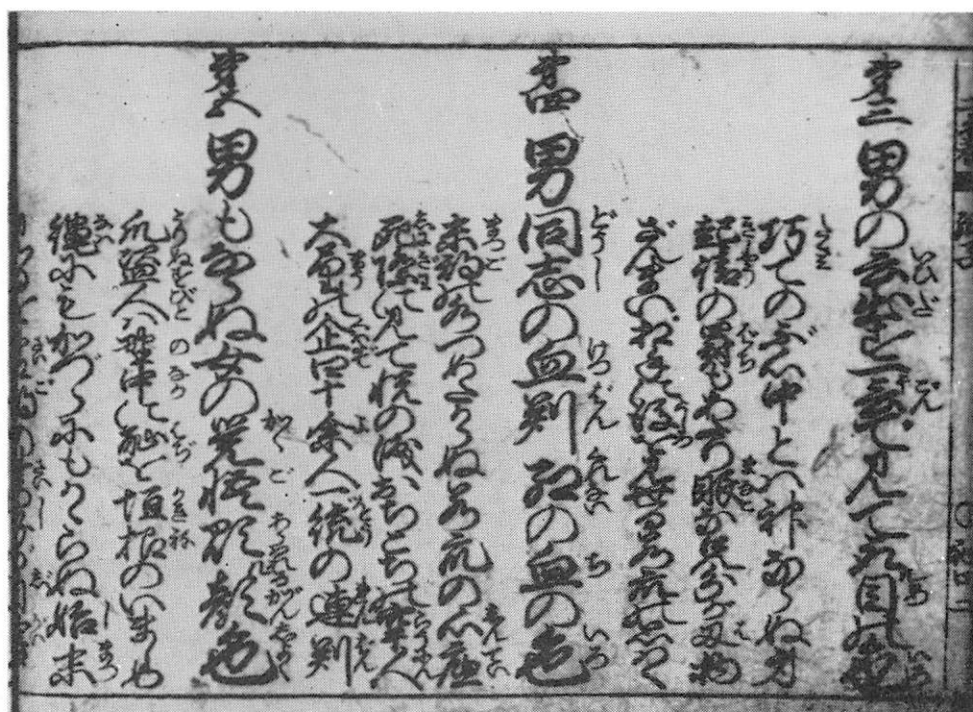


(第三十四図) 『金短冊』二之巻目録オ (中村本)



(第三十五図) 『金短冊』二之巻目録ウ (中村本)





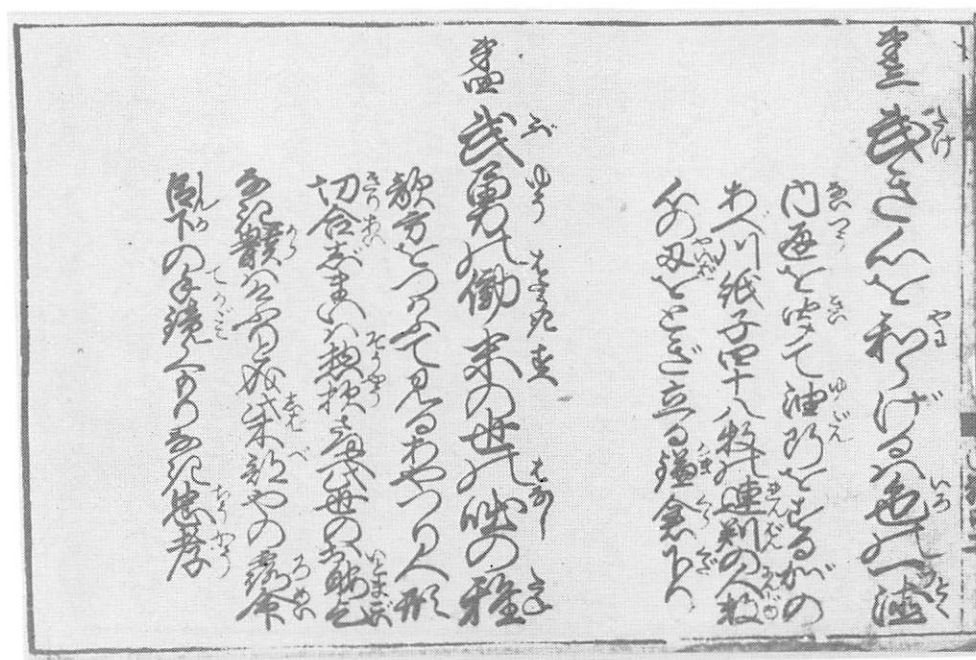
(第三十六図) 『伝受紙子』二之巻目録ウ (国会本)



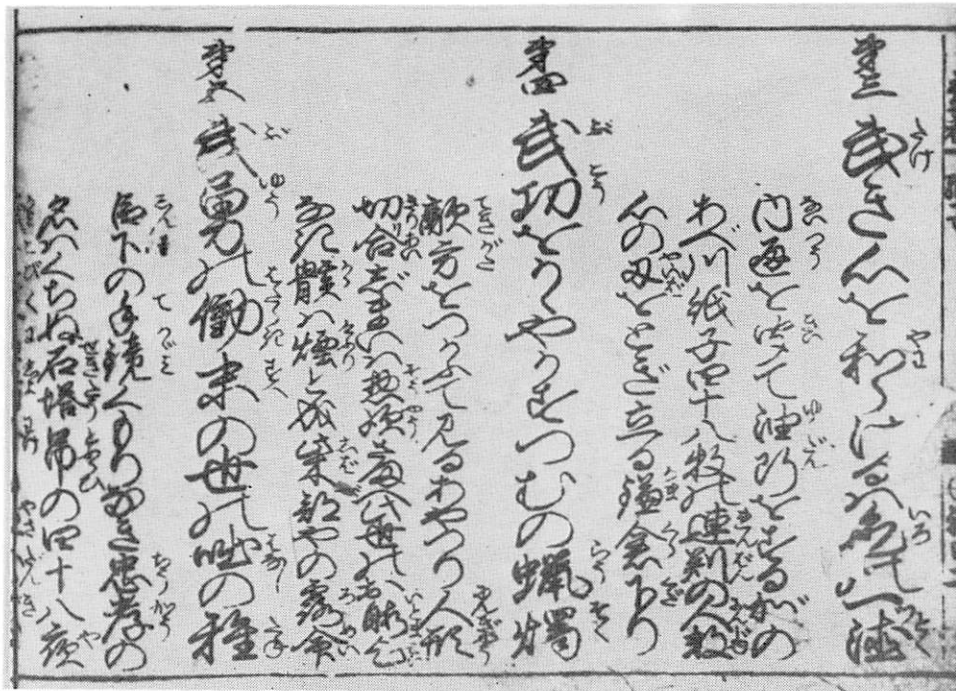
(第三十七図) 『金短冊』二之巻六オ (中村本)



(第三十八図) 『伝受紙子』二之卷六オ (国会本)



(第三十九図) 『金短冊』五之卷目録ウ (中村本)



(第四十図) 『伝受紙子』五之卷目録ウ (国会本)



(第四十一図) 『金短冊』五之卷卅八ウ (中村本)





よこやま・横山ぐんじ・ぐんじ等と埋木で改め、浄瑠璃「金短冊」の小栗判官の世界にあわせる細工をしているのである。一・三・四之巻も恐らく各巻四章に仕立てられたのであろう。そして一之巻では塩冶判官の名に当る箇所や領国などを改め、塩冶妻への師直の恋慕の一章を省くなどの手直しがあったのであろう。この「忠臣金短冊」の印行は浄瑠璃「忠臣金短冊」の大坂上演に思い立ち、享保十九年に江戸の辰松座で上演されたのに合せて、八文字屋の江戸売捌店として以後密接な関係を持つ鱗形屋に出させたものであろう。

以上「けいせい伝受紙子」は宝永七年閏八月刊行後間もなく五之巻第五章の語句一箇所を埋木で改めた。次いで改題改竄三巻本に仕立てた「評判太平記」を正徳初年の赤穂浪士物ブームに乗じて出し、間をおかずに再び「伝受紙子」編成に戻した。浄瑠璃「忠臣金短冊」の人気に乗じ「伝受紙子」印行、また改題改竄本「忠臣金短冊」を出したという事になろう。

正徳二年正月刊の江島其磧作「野傾旅葛籠」横本五巻五冊には、拙著年表にしるしたように二種の本が伝存する。今東洋文庫本をA種本、東北大狩野文庫本・東大霞亭文庫本等をB種本とする。

Aは江島屋市郎左衛門板、Bは菊屋長兵衛刊本である。共に刊年月をしるさないが、本書の序といわれるもの（右の諸本には残存せず、他に菊屋刊記の一本に序を付したものがあがるが、原態か取合本か未調）に正徳二年正月の年記がある。この両者の先後は、A本には奥に「来ル二月

朔日より本出し申候」として「通諸分床軍談」六巻の予告があり、その末に「右作者傾城禁短気同作」とある。「床軍談」は正徳三年中の刊行と推定されるものであるが、刊行時の巻冊数は五巻五冊である。同書は少くとも正徳二年冬までは六巻として予告されていた。従って右予告にいう二月朔日は正徳二年のそれ、「床軍談」刊行が三年二月以降であったら三年二月を指す事もある。しかし「禁短気」の作者である事を強調するのは其磧の八文字屋との確執を背景とするのであって、抗争の流れを考え合せて正徳二年の時点の方に可能性ありというべきであらう。即ちこの予告を正徳二年正月刊行時のものと考えるのである。次に以下に述べるようにB本の方に挿絵の修訂と章題上の数字の削去、板心の一部の削去がある。挿絵はB本の方により本文に即したものが多くようにみえる。ここからA→Bという改修の方向が浮かぶであらう。A種本先出と考える。

以下A種本をもとにB種本での修訂について記す。

巻之一 修訂なし。

巻之二 同（但し東洋本尾題部破れ、有無不明、B本尾題あり）。

巻之三 八丁―三十五終丁（但し廿ノ卅の飛丁あり）板心の「ヤケイ三ノ巻（丁数）」の「三」のみ残すか、それと丁数とを残してあとを削る。

十一丁裏十二丁表の挿絵を全く改める。

十三丁表 第三章章題上の「第三」なく章題二行同文なれど改刻。

十八丁裏十九丁表挿絵部分的に修訂（第四十四・四十五図）。右面

女郎に入れかえたのでその下の男の頭部が変、左面蒲団の上に継目見ゆ。

十九丁裏 第四章章題上「第四」なく章題二行改刻（同文）。第四十六・四十七図を見よ。

三十三丁裏 第一行「しつけ」三字改刻。但し同文。

三十五終丁裏 尾題書名を削り、「卷之三終」のみ存。

卷之四 三丁（本文初）―卅九丁（十四ノ廿九の飛丁あり）の間卅三丁を除いて板心に卷之三と同様の削去あり（「イ」の残る丁あり）。

三丁表 章題上「第一」なし。同文なれど章題二行改刻。

四丁裏 挿絵茶屋の竈にA本「みのや」とあるをB本は削、飴売の売声を改刻。

七丁裏 章題上の「第二」なく章題二行改刻か（東洋本欠丁）。

十丁裏十二丁表 挿絵部分的に改刻（第四十八・四十九図）。左面の上部舟の右や女の背後の柱から上への線に継目見ゆ。

十二丁裏 章題上「第三」なし。章題二行同文なれど改刻。

廿九丁裏 尾題巻数ともに削去。

卷之五 二丁―三丁板心「イ」丁数。六丁―卅二丁（十ノ廿の飛丁あり）板心削去（「イ」あるとなきとあり）。

二丁表 章題の「第一」削。

七丁表 章題の「第二」削。

廿二丁裏廿二丁表 挿絵部分的に改刻。

右面は中央部の人物二名と狐を、左面は左半分を継ぐ。

廿三丁裏 章題上の「第三」なく、章題二行改刻（同文）。

廿七丁裏廿八丁表 挿絵右面は殆ど全面を改め、左面は長持覆の紋のみを削去（廿七丁の丁付を「廿七ノ九」にする）。

三十丁表 第四章章題上「第四」なく、章題二行改刻（同文）。

三十二丁裏本屋名とともに尾題改刻（第五十・五十一図）。

以上卷之一・卷之二には異動はなく、卷之三―五に異動がある。卷之三―五は目録には差異がなく、本文の大部分の丁には板心の「ヤケイ」と「之巻」の文字が削られ、「イ」のみを残す丁、丁付の削られた丁と残る丁がある。章題は章序を示す数字を削り、また章題二行は同文であるのに大部分は改刻する。尾題は題名のみ削り巻数を残すもの、共に削るもの、尾題巻数を存するが改刻のものがある。挿絵は部分的に改刻のものと、見聞き一丁全く改刻のものがある（卷之三―四丁裏五丁表、卷之四―卅三裏卅四表、卷之五―四丁裏五丁表の挿絵は改刻なし）。挿絵については後に考えるとして、本書もまた「伝受紙子」と同じような板木の使われ方をしたように思われる。即ち卷之三―五によって逸名の改竄本を印行し、また『旅葛籠』に戻すという事をやっているのであろう。目録の板心を削っていないという事は改竄時に目録を利用しなかったたであり、卷之三・四の尾題を削っている事、本文の板心の「ヤケイ」を削っている事と思ひあわせて題名を異にする本に仕立てられたたのであり、章題が同文ながら改刻されている事は改竄本では章題が変えられていた事を示し、旁目録は新製の必要があったのである。そして卷之三の初頭、第一章初め二―七丁に板心の文字を存するのは、七丁裏が第二章初に当

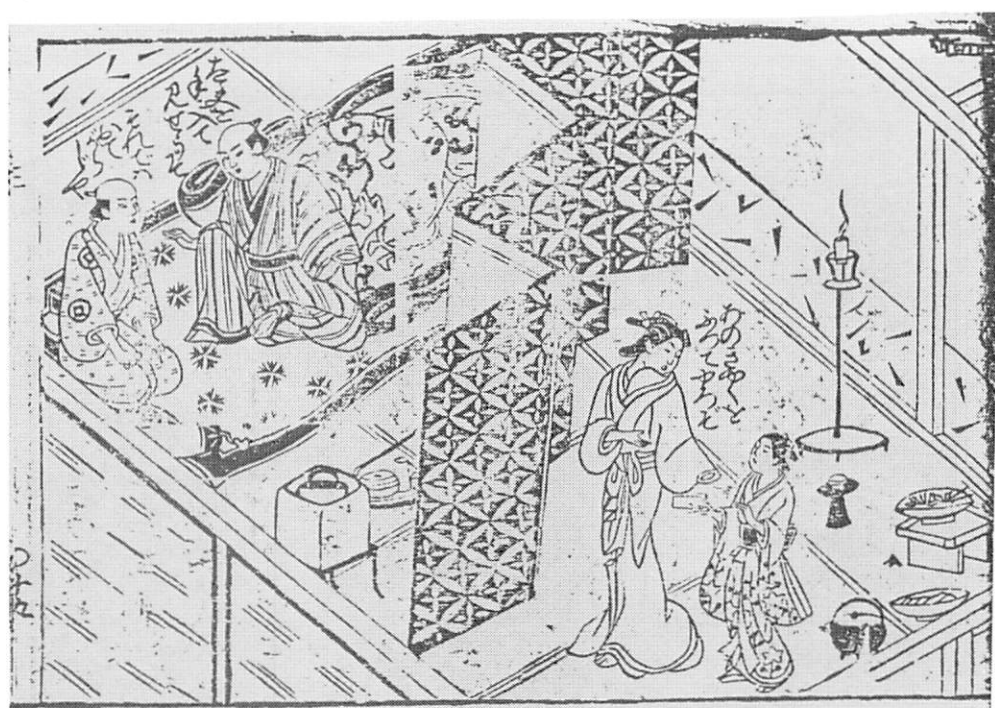
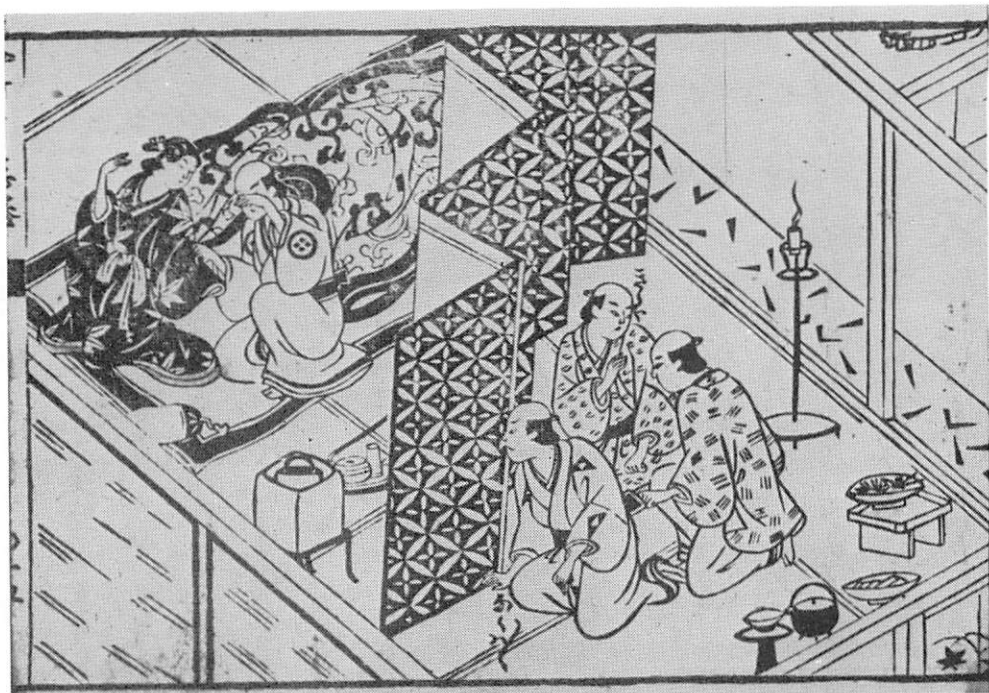


(第四十四図) 左右 『旅葛籠』 A本巻之三、十八ウ十九オ (東洋本)



(第四十五図) 左右 『旅葛籠』 B本巻之三、十八ウ十九オ (東北大本)



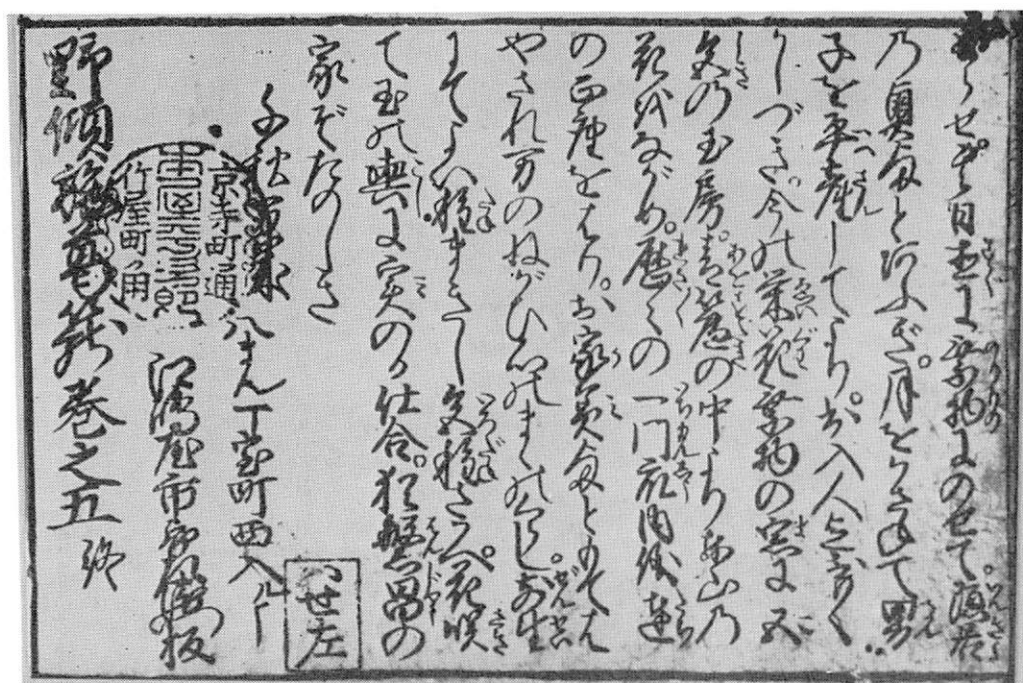


乃家入へんひのじとふはあ合  
 さぬ結をれ秘術とつをよ姑  
 乃ねど男とたそふものあふは  
 ていかちあちとく中くそんせう  
 しかた名をの上もものありあ  
 しくいまりてもかへ思ひ入て  
 なるあふりねのあつたねてん  
 てこちつをうそぢやとあそ軟  
 かりやうかたかふと解さう  
 ばかりいそきし一様そり  
 西実新町書院あすな草紙  
 大坂らうせんあつたの寺書  
 難波の梅もさうさうに松と  
 宵は夜もて。松うさうくしあ  
 けし水あひより一目とひま

(第四十六図) 『旅葛籠』 A 本卷之三、十九ウ (東洋本)

乃家入へんひのじとふはあ合  
 さぬ結をれ秘術とつをよ姑  
 乃ねど男とたそふものあふは  
 ていかちあちとく中くそんせう  
 しかた名をの上もものありあ  
 しくいまりてもかへ思ひ入て  
 なるあふりねのあつたねてん  
 てこちつをうそぢやとあそ軟  
 かりやうかたかふと解さう  
 ばかりいそきし一様そり  
 西実新町書院あすな草紙  
 大坂らうせんあつたの寺書  
 難波の梅もさうさうに松と  
 宵は夜もて。松うさうくしあ  
 けし水あひより一目とひま

(第四十七図) 『旅葛籠』 B 本卷之三、十九ウ (東北大本)



(第五十回) 『旅葛籠』 A本卷之五、三十二ウ (東洋本)



(第五十一回) 『旅葛籠』 B本卷之五末丁 (東北大本)

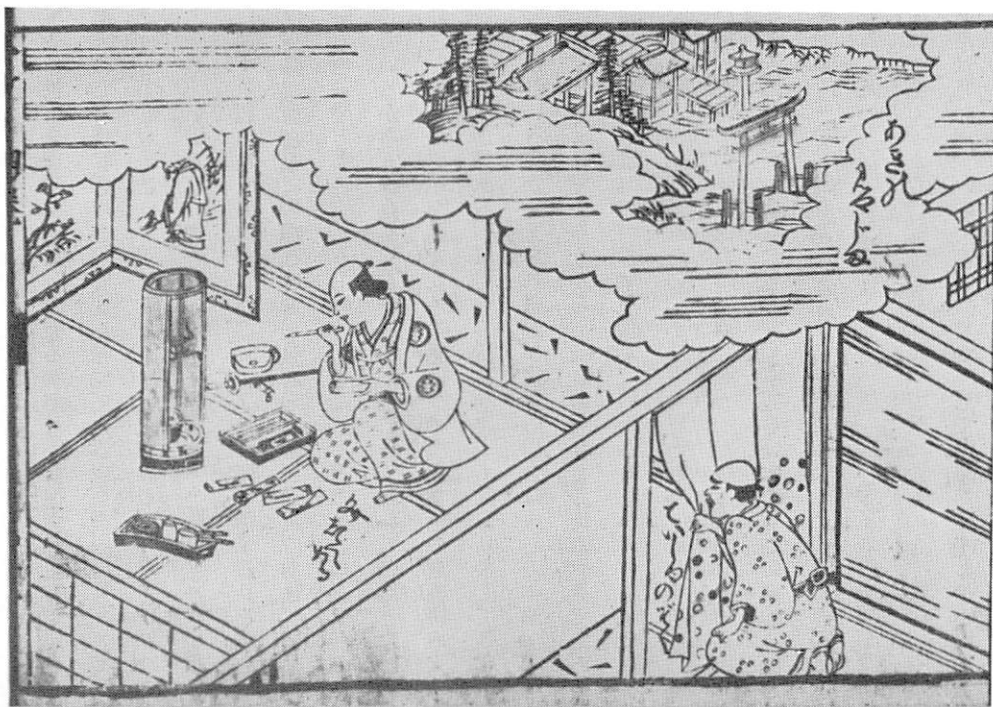


(第四十八図) 左右 『旅葛籠』 A本巻之四、十ウ十一オ (東洋本)



(第四十九図) 左右 『旅葛籠』 B本巻之四、十ウ十一オ (東北大本)





り、この第一章を別の話にさしかえた事を示そう。この第一章は卷之一第一の色種を現銀掛値なしで売る女郎野郎前後屋八色右衛門のところを美人にしては鹿恋種として安く売っている少女を掘出しとして買った話に対応する。卷之一を利用しなかったのであるから、それに対応する卷之三第一を捨てたのであろう。『旅葛籠』は「野傾」を称し野郎と女郎に関する短篇集であるが、卷之一・二は野郎に関する話を集め、卷之三に三都、卷之四に私娼と地方、卷之五に京坂近辺の木辻・柴屋町・撞木町と色茶屋と女色をとりあげる。卷之三・五の板心に三・五の文字を残しているから、改竄本でも卷之三・五に当てられていたと思われるから、卷之一・二の男色を捨て女色の話に改め全篇女色の遊興を取上げたものに仕立てたか、あるいは男色の話を卷之一・二に新製して新刊の体をとったかという事が考えられるが、後者の場合は板心の「ヤケイ」を取て削らずともよいであろうから、前者の場合を考えるべきであろう。その題名にあるいは「イ」の字を含んでいたかもしれない。さような今日伝存未詳の一本が印行されたのであろうと思われる。それを再び『旅葛籠』に戻した。その時に改竄時使用しなかった板木を合せたのが板心に「ヤケイ」の字の存するものであり、章題も埋木でもとに戻し（但し改竄本では第一・第二等の章序を示す数字がなかったのを復元しなかった）、卷之五の尾題を埋木でもとに戻した。卷之五の尾題が改刻である所以である。ただ挿絵は継接によって改めたものを手間の上でもとに戻す事はしなかったであろう。かくして出来たのがB種本である。

右のように考えて納得が行くのであるが、ただ何故面倒な手間をかけ

て挿絵を修訂したかとなると理由を思いつかない。前掲第四十四・四十五図についてみると、本文第四章に応じ、客を振ると噂の高い女郎について、A右は大尽・末社噂のところ、左は振らせぬと賭をした末社が床で兄と偽り泣落しのところ。B本右はその女郎を貰うのに成功、左は女郎が振ろうと心構えして床に入ろうとし、床では末社が振らさぬと傍輩と約のところ。Bの方が経過に沿っているようか。四十八・四十九図は第三章に応じ、それは「好色盛衰記」卷四の四による話で、熊本の米問屋の手代が親方の金で宮島で豪遊し、『盛衰記』では親方に追払われ女郎は指の切り損になるを、女郎と心中の約束をし、それを察した広島の間屋にだましすかさず帰国、男は請人預、女郎は形見分をして当惑とひねる。挿絵は右面はB本に改刻はあるが共に遊興の体、左面はA本の方が本文に沿っており、B本の心中の約束を亭主が聞知するという事はない。しかし話の大意をB本の挿絵の方が語っているといえる。このようにほぼB本の修訂の方が本文の要をつかんで構図にまさり、緊迫感ともいべきものがある。しかしこのような理由で面倒な手間をかけてまで挿絵を手直しするとは思えない。卷之四の四丁裏の飴売の売声は原刻は桜館の名がある。桜館の流行に関係するか。卷之五廿八丁表の紋を削るのは原刻時にそれと知れた婚礼があったが改刻時には読者に通じないといった事があったかもしれないが、これも憶測に過ぎぬし、たとえそうとしても改刻の強力な理由にはなり得ぬであろう。やはり新板めかすという目的のためであろうかと思う。

ところで卷之三・五本文にはB本に少しく板心に「ヤケイ」の文字を

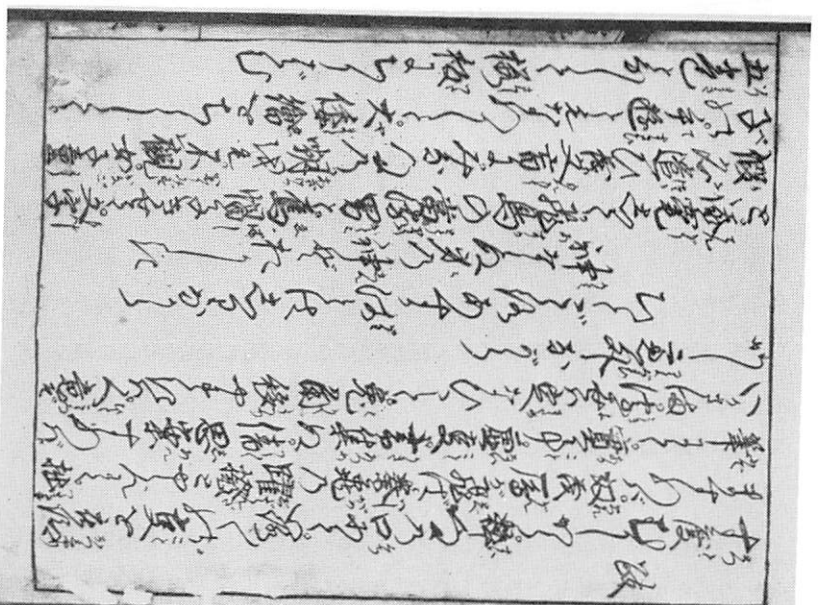
残す箇所がある。この箇所は前述巻之三第一章のように改竄本では挿しかえられたのであろうか。この点を確める要があろう。問題箇所は巻之四の卅三丁、巻之五の四・五丁である。ここは結論としては挿しかえずにそのまま改竄本に用いられたと考える。前にしるしたように巻之四の卅三丁裏卅四丁表、巻之五の四丁裏五丁表は見開き一丁の挿絵となっており、この両方とも修訂されていないのである。他の挿絵に手を入れたがこの二丁には手を入れなかったので板心の文字を削り忘れたというような作業上の手違いがこのような結果になったのであろうと思う。なお巻之四右挿絵の丁に続く卅五丁表の半ばより第四章がはじまるが、この章題にはB本にも「第四」とある。この章題以後の卅五丁表後半部はAB全く同文ながらBは改刻の感がある。この辺に右にいう以上の事情があるかもしれぬが思いつかない。

最後にさような改竄本が誰の手で作られたかという点、八文字屋と抗争中の其蹟が刊行点数の多さをはかってやったのではなからうかと思いが明かでない。また「旅葛籠」に何時誰が戻したか。第五十一図を見ていただきたいが匡廓を見ると菊屋の名の所で継がれているのがわかる。ここの尾題の改刻が菊屋名入木と同時なら戻したのは菊屋という事になる。時期については享保十四年刊の「熊坂今物語」辺から「旅葛籠」が菊屋の蔵板目録に見えるのが一つの目安になろう。

以上複雑な修訂例を三例あげたが、それよりは単純ながら丹念な細工をする例を既知のものながら一つ加えておく。

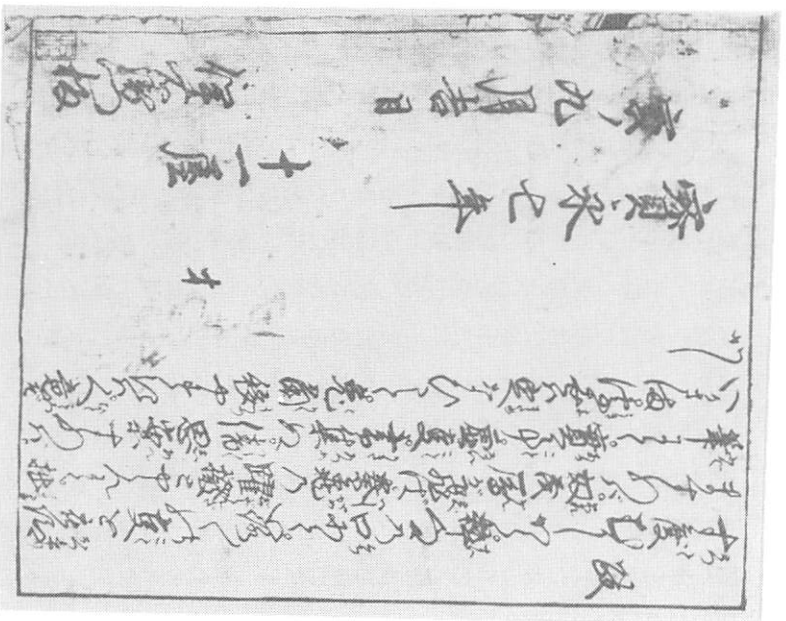
「飛鳥川当流男」大本五巻六冊は秋花堂久澄の作、元禄十五年九月上村平左衛門・岡田伝兵衛の刊。無常を感じる二人の青年が野郎遊びに憂いを忘れ溺れる。遊女遊びをよしとする男と当時流行の趣向である女色男色優劣論争をする事があり、さような遊びに深入りし零落した友人を見て改心という。この野郎遊びの部分に当時現役の歌舞伎役者の名が頻出し、当時上演の狂言名が出る。役者評判記として画期的な「役者口三味線」の出たのは元禄十二年三月であるが、その中にも男色女色の争いが書かれていた。本書はこのような時代や作の影響を受けていよう。

「西鶴あと逐<sup>当流たがみの上</sup>」は宝永七年九月十一屋伊右衛門の印行、八年二月に再印されたが、この本は「当流男」の改題改竄本である。久澄の原序を除き宝永其月其日の西廬名の序を付けるが、この序は「西鶴織留」序を補綴した体のもの。跋は原跋の後半「飛鳥の当流男」云々の文句を含むところを削って前半のみを用いている（第五十二・五十三図）。板心は「当流男」のまま。この時期に「当流男」が再生させられたのは、宝永五年正月刊西沢一風の「風流三国志」、同年閏正月刊北条团水の「野傾友三味線」などに見る女色男色優劣論、次いで江島其蹟の代表作「傾城禁短気」（宝永八年四月刊）の予告が出された頃で、その優劣論の列につらなり得る作と見た点にあらう。ところが前述のように元禄末頃当時の役者名、当時上演の狂言名が出、新板をよそおって出すには支障がある。そこで十一屋のとった手段は、これらの役者名をすべて埋木で宝永末年現役の役者名に改め、その役者の芸に言及する部分も改めて役者名に応ずるようにし、狂言名も改めるという事であった。その修訂



(第五十二図)

『当流男』跋 (都立本)



(第五十三図)

『あと逐』跋 (京大本)



(第五十四図)

『当流男』一之卷八才（都立本）



(第五十五図)

『あと逐』一之卷八才（早大本）

浪中ハいふはたふす八咫の原その外系とま  
 まくうりの刃ねあたらすのちいさき神を  
 けくねひもて深の市のつひをらまへん  
 の毒とて系わひは身をやけいすこま  
 やあとして屍をうち顯負くの評判も腹の  
 くと河原にあまこも系なれ下女うさん敷の  
 せりあひの腹ののぐれ増はさるえまけぬ  
 とてが海うちりりりあそとねいでの流も  
 わひとあうくきあへて足さばあ敷土辰  
 二敷けきき川をなつたあさかおぼらの  
 とらまうとせりぬ大まけとてあそり  
 夕つゝあのをあもけあゆまけいなり

(第五十六図) 左右 【当流男】 一之卷八ウ九オ (都立本)

浪中ハいふはたふす八咫の原その外系とま  
 まくうりの刃ねあたらすのちいさき神を  
 けくねひもて深の市のつひをらまへん  
 の毒とて系わひは身をやけいすこま  
 やあとして屍をうち顯負くの評判も腹の  
 くと河原にあまこも系なれ下女うさん敷の  
 せりあひの腹ののぐれ増はさるえまけぬ  
 とてが海うちりりりあそとねいでの流も  
 わひとあうくきあへて足さばあ敷土辰  
 二敷けきき川をなつたあさかおぼらの  
 とらまうとせりぬ大まけとてあそり  
 夕つゝあのをあもけあゆまけいなり

(第五十七図) 左右 【あと逐】 一之卷八ウ九オ (早大本)

そまふりて大なる我の十帝せも流きの  
いふとふと下流のいふとみは村長十帝が  
み帝先ふじりそのわくこりりといふ  
味よりいりきりといふ足跡ありその名を  
富太のふふ門傍ぐりの跡あり一八  
字をぬくめりけいこのわくをせ義  
うねくふ町をせたりてあふすた  
うねたより夫人雲をせたりてわ  
まてりたまたまといふわくをせ  
ハあせまたふといた義人八目あり  
わく表のあせをせ神國のめくわり  
たいうねくわたりけい。武士も町き

そまふりて大なる我の十帝せも流きの  
いふとふと下流のいふとみは村長十帝が  
み帝先ふじりそのわくこりりといふ  
味よりいりきりといふ足跡ありその名を  
富太のふふ門傍ぐりの跡あり一八  
字をぬくめりけいこのわくをせ義  
うねくふ町をせたりてあふすた  
うねたより夫人雲をせたりてわ  
まてりたまたまといふわくをせ  
ハあせまたふといた義人八目あり  
わく表のあせをせ神國のめくわり  
たいうねくわたりけい。武士も町き





足踏れんやうさ。あまねハ役者の力と下  
 のまよのわたり下び人替足尾修の役人赤  
 梅ぐの云儀入一ひ移りひ移り人  
 の子屋どういふそとあつねどもあつね  
 がらうのあそびはとあどつとあそび梅  
 安ふありんと云ふおぼれにやとてまのこ  
 ころひ役年中実役れ飯菜よりてい  
 らまゝ人あり一ふはの男あやう今ハ  
 那れわたり役者としてありやどいふ  
 足系里の梅の危ナるま根室の美方  
 山下竹馬と舌を海くくひ。今又さう  
 とおんやうのそとらこ。足系里を何

(第六十図)

『当流男』一之卷十ウ (都立本)

ぞりれんやうさ。あまねハ役者の力と下  
 のまよのわたり下び人替足尾修の役人赤  
 梅ぐの云儀入一ひ移りひ移り人  
 の子屋どういふそとあつねどもあつね  
 がらうのあそびはとあどつとあそび梅  
 安ふありんと云ふおぼれにやとてまのこ  
 ころひ役年中実役れ飯菜よりてい  
 らまゝ人あり一ふはの男あやう今ハ  
 那れわたり役者としてありやどいふ  
 足系里の梅の危ナるま根室の美方  
 山下竹馬と舌を海くくひ。今又さう  
 とおんやうのそとらこ。足系里を何

(第六十一図)

『あと逐』一之卷十ウ (早大本)

は挿絵の中にまで及ぶ。第五十四図は「当流男」一之巻八丁表、五十五図は「あと逐」一之巻八丁表、木戸口の看板の狂言外題や名代・座本名が改められている（但し外題上の人物像はそのまま）。これに応じた本文は七丁裏から八丁裏九丁表にあるが、両書の八丁裏九丁表は第五十六・五十七図に掲げた。「当流男」には八丁裏九行目より「曾我十二段」、藤川武左衛門・（山下）半左衛門・沢村長十郎・山本哥門と狂言名・役者名とその短評がある。この「曾我十二段」の外題での狂言上演は「歌舞伎年表」や評判記に見えぬが、名代・座本は元禄十三年十一月より一年間の事実と一致する。評判記に見る事の少い夏秋の間にかかる狂言が上演されたのであろう。「あと逐」は狂言名が「小栗判官」に変えられている。役者名は小佐川重右衛門と嵐喜世三郎に変えられ、芸評も所々の語句を変えて小佐川らしくしているが、嵐の方はもとのまま。また「当流男」は朝比奈の役故に「わた持の吉秀も」云々とあるのを「あと逐」は小佐川の芸のすさまじさを朝比奈に比べたとして通じると見たのであろう、放置している。無理な修訂をしている事は九丁表二行目などに著しく目につく。なおこの狂言は「役者大福帳」（宝永八年三月刊）京之巻の小佐川十右衛門の項に「去秋四十七人の敵打大岸宮内と成ての芸」とあり、宝永七年三月刊「役者謀火燵」によれば宝永七年は小佐川・嵐とも都万太夫座に出勤、名代・座本もこの年の事実にあう。ただこの赤穂浪士劇の外題は記録されていない。赤穂浪士劇は小栗に仮托するものと塩冶判官の事とするものがあるが、「あと逐」によって小栗の世界に仕組まれていた事がわかる。

第五十八図は「当流男」一之巻十丁表、狂言外題「曾我花鳥風月」、役者名生島新五郎江戸上り、中村四郎五郎。これは元禄十四年七月、京都の万太夫座上演の「曾我大金花鳥風月」の事。「あと逐」は「けいせい野沢蛙」、役者名は生島十四郎・高尾若右衛門に変えられている（第五十九図）。宝永七年には野村増右衛門一件に仕組んだ狂言が諸座で上演されているが、役者名から見て京都の亀屋座でこの外題で上演された事がわかる。ただ生島十四郎は「役者謀火燵」京之巻によれば立役中ノ上上、高尾若右衛門は敵役の上とともに二流役者である。この生島を選んだのは当年の江戸上りというところが生島新五郎と同じという理由からであらう。第六十・六十一図は両書の同丁裏、「当流男」に中村四郎五郎の素姓をしるすが、その「赤」の字を生かしての変更は「あと逐」の短評の信憑性を疑わせるが、高尾を選んだのは小話役者からの昇進という経歴によるであらう。便宜的で無責任なともいえるがとにかく細かく埋木で現状に合せる修訂をしているのである。またこれにに応じて目録の修訂もしている。

このような改竄本でも当時の読者には面白かったのであろうか。しかし演劇資料として使用する事は注意を要する。狂言外題はともかく役者個々の情報は前述のような無責任さであるからである。同書は拙著年表に指摘したように文政頃も印行されていたらしい。過去の話として読めるだけの時間の経過がそこにあったからであらう

我々はそのような事が確かにはいえないという事を頭では知りながら

も、感覺的に何となく整版本は写本や古活字版などに比べて本文が安定しているように思いがちである。しかし技術としては板木の細かい箇所まで修訂が可能であり、今日の我々がこんな面倒な細工をする位なら同じ手間で新しい板木が作製出来るのではないかと思うようなものまで手間をかけているのを見ると、板木作りからの手間と時間、板木の作製費、本屋の資力や經濟觀念、あるいは版權の問題もからんで、我々の理解に誤りがあるかとも思う。それに本稿に扱ったのは大衆小説であるせいもあるのか、本屋の無責任、御都合主義によつて、一作品が埋木によつて面目を改めるならまだしもで、分断され、接合されて別作となり、また復元される。その間に題名も外觀も全く変らぬようでは実は異本が生じる。それに整版本を何本も校合するなど考えられぬ事と思つていたのに、事情によつて短小の語句に異文が生じると知つては油断がならぬ。挿絵までも例外ではないとなると、整版本の安定を思わす外觀に却つて深い陥穽ありというべきであらう。